この素晴らしいキャラ達に祝福を！

めむみん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このすばのキャラクターの誕生日を祝うシリーズです！

設定は魔王討伐後の世界です。

カズマ視点です。

目　次

図りごと　1
新たな導き　13
分からぬ思い　35
変わらぬ想い　53

図りごと

《ｆｏｎｔ：ｕ３３》―ＨＡＫＡＲＩＧＯＴＯ―《／ｆｏｎｔ》

桜が芽吹き、満開へと向かっている今日この頃。

俺達はダクネスを除き、クリスを入れた面子で集まっていた。

「てな訳でダクネスへのプレゼントは可愛い服やアクセサリーだ」

ダクネスの誕生日会の準備とその流れの説明も大方終わり、最終調整だ。

「分かったわ！それで私達は何を買えばいいのかしら？」

アクアがいい質問をした。

「アクアは髪飾り、めぐみんはネックレス、クリスは靴を頼む。俺は服だが、もう買ってある。これに合う感じのを考えて選んできてくれ」

「髪飾りならいいお店知ってるからそこで買ってくるわね！」

アクアの美的センスは群を抜いている。

こういうのは適任だ。

「私はネックレスですか。任せてください！」

「間違ってもかっこいいからとかで選んじゃだめよ」

アクアの注意もよく分かる。

こいつならやらかしかねない。

でも、めぐみんがそんな事しないのは俺は知っている。

「なっ！見くびらないでください！いつも新しい服やアクセサリーをカズマに可愛いと言って貰える様に選んでるんですよ！そんな私がミスしませんよ！」

如何して恥ずかしがりもせずに、コイツはこんな事を言えるんだ。

こっちが恥ずかしい。

「そ、そう。めぐみんってカズマの事大好きよね」

「そうですよ。それが何か？」

「「・・・」」

そうですよじゃないだろ！

当たり前の事聴くなよって言わんばかりのその表情、絶対可笑しいから！

何でめぐみんは、こんなに堂々としてんの？
アクアとクリスも気まずそうにしてるって。
みんなに仲間以上恋人未満の関係バレてから吹っ切れたのか、私の男ってギルドでも言うようになった所為で、最近ギルドにも行ってない。
行ったら俺が恥ずかしい思いをするだけだ。
最近クズマとかよりもめぐみんの男って呼ばれ始めてるし、ギルドに行けば、からかわれ続けるのは目に見えてる。
めぐみん曰く、『勇者カズマに惚れてるだけで、カズマの事なんて全く見てない女や、金目当ての女払いです』だそうだ。
ギルドの連中はこの事も知っているが、恋人未満の関係については知られていない。
これは不幸中の幸いとも言える。
アクアを酒と金で黙らせて正解だった。
「えっとあたしは靴だよね。ヒールとかの方がいいのかな？」
クリスが話題を変えてくれて助かった。
「それでいいと思う。あとの判断は各自で頼む。それじゃあ解散！」
こうして会議は終わり、次の準備に取り掛かろとしていたのだが。
何処か浮かれてるめぐみんに声を掛けられた。
「カズマ、カズマ。一緒に買いに行きませんか？」
何この可愛い生物。
俺とデート出来ると思ってテンション上がってたのか。
一つ返事で、オッケーって言いそうになったぞ。
「悪い、まだ打ち合わせが残ってるから無理だ」
「そ、そうですか。あまり無理しないでくださいね？では、行ってきます」
凄く落ち込んでめぐみんが出て行くのを見送った。
何もしてないのに罪悪感が。
この事は一旦忘れよう。
じゃないと気付いたらめぐみんとデートしてるかもしれない。

何とか後ろ髪を引かれながらも、目的地に辿り着いた。
ここはダクネスの実家だ。
ダクネスの親父さん、イグニスさんに会いにきたのだった。
「おお、カズマくん来てくれたか！娘は迷惑かけておらんか？」
「迷惑はかけられっぱなしですが、比較的マシにはなってると思いますよ」
普通はここで大丈夫ですと答えるのだろうが、生憎ウチのパーティーにそう言えるやつは居ない。
「娘がすまないね」
「いつもの事ですから。慣れてますよ。それより例のアレ準備出来ましたか？」
「勿論だとも。話は付けてある。此処にアクアさんかめぐみんさんの名前を書いて貰えれば、後は娘が名前を書くだけだ」
親父さん仕事が早いな。
もうちょっと時間がかかると思ってたけど、全て出来てるとは。
「確かに受け取りました。ダクネスいや、ララティーナの事は俺に任せてください！」
「カズマくんありがとう！君には感謝してもしきれない。もし困った事があれば是非相談してくれたまえ」
これは丁度いい機会だし頼んどこう。
「それじゃあ一つ良いですか？」
「一つと言わず幾つでもよいぞ」
「王都から偶にやって来る貴族をなんとか出来ませんか？わざわざこんな辺境の田舎まで来てやったんだから会わせろとか、ウチの子と結婚しろとか言って暴れられるの困ってるんですよ」
めぐみんがいつも爆裂魔法を使って脅は、じゃなくて、説得して、帰って貰ってるけど次から次へとやって来てキリがない。
因みにダクネスが出ると、あのダスティネス家の令嬢が居るのだから、ウチの子もって逆効果になってしまう。
「それについては娘からも聞いているよ。君は、今や勇者だから仕方ないだろうとも言えるが、分かった。私の方で、出来る限り来ないよ

うにさせよう。最悪アクセルへの貴族の出入りを規制すればなんとかなるだろう」
　出入り規制とか出来るのか。
　やっぱ持つべきは権力者の知り合いだな。
「クレアとレインのとこは別に問題ないので、規制するなら対象外でお願いします」
「ふむ、分かった。では娘の事を頼んだぞ」
　これで今日の予定は全て完了だ。

　めぐみんの悲しみの篭もった爆裂魔法の音を聞きながら街をぶらぶらと歩いていた。
　勇者のホームタウンとして栄え始めたこの街には、見知らぬ店が増えている。
　こうやって特に目的もなくふらついていても案外楽しめるモノだ。
　爆発の音でビビるかビビらないかで、よそ者かどうか瞬時に判明するのがこの街の面白い所だ。
「あっ！カズマさん！お久しぶりです！」
「ゆんゆん久しぶりだな！あれ？めぐみんと一緒じゃないのか？」
　てっきりゆんゆんと一緒に爆裂しに行ったと思ってたんだが。
　って隣に居るのサキュバスの店の子じゃ。
「いえ、今日はロリーサちゃんと街をぶらぶらとしてまして、カズマさんこそめぐみんと一緒じゃないんですね」
「まあな、所で二人はどういう関係なんだ？」
　やっぱり服装は違うとはいえこの子間違えなくアクアに消されかけてた子だ。
　ロリーサって偽名だよな？
　ロリサキュバスのもじりな気がする。
「共通の知り合いが居たんです。それで先輩と知り合いました。カズマさんいつもありがとうございます」
「こちらこそいつもお世話になってるよ。先輩と後輩ね。その知り合いってダストか？」

最近ゆんゆんがダストと付き合ってるとか、リーンと取り合ってるとか聞くしその線だろう。
「「は、はい」」
出来れば名前を出したくなかったって感じだな。
これから察するにあの噂はデマだな。
「あんまりあいつとつるまない方がいいぞ。ゆんゆんとダストが付き合ってるって噂もあるし」
「ち、違いますよ！・・・あの、カズマさんその噂広めた人知りませんか？」
ゆんゆんも苦労しているみたいだ。可哀想に。
「悪い、アクアからの又聞きだから分からない。そうだ。ゆんゆん、クズマとかカスマって広めたやつ知ってるか？」
未だに判明していない犯人。
そういや広まった時にゆんゆん居なかったし分かるわけないか。
「えっと、アクアさんが広めてたって聞きましたよ。・・・まさかアクアさんが！」
まさかの新情報！
帰ったらあの駄女神とっちめてやる！
「それは分からないけど、情報提供助かった。遊びたかったらいつでもウチに来てくれ、そうすりゃ噂も落ち着くだろうし」
「いいんですか？でも迷惑じゃないですか？」
本当にいい子だなゆんゆんは。
うちのポンコツどもに爪の垢を煎じて飲ませたい。
「大丈夫だって、友達が家に来るのは迷惑じゃないだろ？」
「はい、むしろ嬉しいです」
「それと一緒だ。ゆんゆんが屋敷に来てくれたらみんな嬉しいし、迷惑なんて思ってないって。それに俺とゆんゆんはもう友達だろ？」
実際アクアやダクネスも、最近ゆんゆん来ないの寂しいって、言ってたから間違ってないだろう。
めぐみんに関しては最近ゆんゆんが来なくなって楽でいいですねとか言いながらそわそわしてる。　どんだけツンデレなんだよって

思った。
こうして友達が出来てたら来なくなっても仕方ないか。
あれ？ゆんゆんが急に喋らなくなった。
「カズマさん、ゆんゆんさんが泣いてますよ」
状況から察するに嬉し泣きだ。
「ゆんゆん？」
「あっ、すみません。友達って言って貰えたのが嬉しくてつい」
こんな事で泣いていたら、俺はめぐみんと付き合ったらどうすりゃいいんだ？
可哀想だし、何かしてあげたい。
「そうだ今からウチ来るか？」
「え！」
二人が驚く。
そっかロリーサの方は屋敷に来れないんだった。
「急に言われても無理だよな。何処かで飲まないか？勿論俺の奢りで」
この後、ゆんゆんが数分惚けたまま動かなくなったが、三人でカフェに行った。
魔王討伐の時の話とか、ダストの好きな人は誰かとかで盛り上がった。
最有力候補はリーンで決まった。
何故かロリーサは断定的にリーンだって言っていた。
もしかするとダストの最近の夢はリーンなのかもしれない。
リーン以外で可能性として上がったのはアクアを堕落させ、隙あらばめぐみんに抱きつこうとする俺の敵であるセシリーとか言うプリーストしか出て来なかった。
後にめぐみんから女の匂いがすると問い詰められたのは別の話だ。

時は経ち、誕生日当日。
予定通り準備は完了し、後は、ダクネスが起きるのを待つだけだ。
現在、アクアの披露する宴会芸の安全確認をめぐみんとクリスが

行っている。
一度あいつの炎を出す芸で、ボヤ騒ぎになったから念には念をという事で確認している。
俺はダクネスが起きた時に足止め出来るよう、屋敷内で待機している。
まだ五時だから、起きてくる可能性は殆どないけど。
俺がこんなフラグとも言える事を考えた所為か、直ぐに問題が起きた。
アクア達が居るであろう方角から爆発音がしたのだった。
「大丈夫か！」
そう言って窓を開けて見てみると丸焦げになったアクアと、それを遠巻きに見ているめぐみんとクリスが居た。
二人は無傷のようだ。
「アクアが鳩を出すと言って取り出した金属の塊がピッピッピーって鳴って爆発しました！」
時限式爆弾とかだろうか。
何故そんな物があるんだとか聴きたいが、今更こんな事で驚いてられない。
「アクアさんが危ないから逃げてって言ってくれたおかげで、あたし達は無事だったんだけど、アクアさんが赤い線がどうとか言って、いじりだした後にめぐみんの言ってた音がして爆発したんだよ」
あいつホント運ないよな。
赤い線切ったら爆発したとかそんな所だろう。
「アクアの事は頼んだ。俺はダクネスの様子見てくる」
「分かりました！起きていたらアクアの介抱に連れてきてください。そうすればバレません」
「分かった」
急いでダクネスの部屋まで走り、様子を見たがまだ寝ていた。
久々の休日だからぐっすり眠っていて助かった。
アクアが心配だし、あっちに行こう。

戻るとアクアは着替えていて、何も無かったような状態になっていた。
アクアの涙目だけは変わってないけど。
「アクア大丈夫だったか？」
「全然だいじょばない。けど自分でヒールしたからもう大丈夫」
大丈夫そうで何よりだ。
確認しといて良かった。
中で爆発していたら、火薬もあるし屋敷全焼なんて事も有り得た。
「ダクネスは寝てたの？」
「嗚呼、ぐっすりとな。取り敢えず、物を出す系の芸はなしで行こう。確認はこれで全部か？」
「後は花鳥風月とかいつものやつだけですし、もう止めてもいいと思いますよ」
まあ、問題ないか。
「分かった。誰かそろそろいい時間だからダクネスを起こしてきてくれ」
「私が行きます。アクアは休んでてください」
「ありがとうめぐみん」
確かにめぐみんが適任か。
クリスが行ったら怪しまれるし、俺が行くと襲われる可能性がある。
「俺達は飯の準備だな」
「「分かった」」

料理も並び終え、準備万端だ。
クラッカーの用意も済んでる。
後はめぐみんがダクネスを連れてくるのを待つだけ。
そして数分経ち、扉が開かれた。
「今日は久しぶりにクエストを受けないか？」
ダクネスはめぐみんと話していて、気付いていないようだった。

そして俺達はクラッカーを引いた。
「な、何事だ？」
一瞬戦闘態勢に入ったが俺達を見て直ぐに力を抜いた。
「「「ダクネスお誕生日おめでとう!!」」」
「あ、ありがとうみんな！」
ダクネスは目頭を押さえて喜んでいた。
「これみんなからのプレゼントだよ。服はカズマくんで髪飾りがアクアさん、ネックレスはめぐみんで私がこの靴だからね」
「ダクネスほらちょっとこっちで着替えて、着替えて」
「嬉しいのだが、これは私には似合わなくないか？何方かと言うとめぐみんの方が」
内心嬉しいクセに素直じゃないな。
ちなみに色は黄色で揃えてるから明らかにダクネスカラーだ。
「もう、いいから早く早く！」
アクアに急かされてダクネスはクリスと三人で別室に連れていかれた。
「成功して良かったですね！」
「そうだな。でもまだ終わってないからな。最終目的は果たせてないし」
「分かってますよ。話は変わりますが、今夜カズマの部屋に行ってもいいですか？」
確かに話は変わるって言ったけど変わり過ぎじゃないか。
それに何気に魔王討伐してから初めての誘いだし、断りたくないけど、今日無理なのは仕方ない。
「嬉しいんだけど今日は無理だ。また今度な。そうだここに名前書いてくれないか？」
言って俺は結婚届をめぐみんに渡した。
「まあ、いいですよ。ってカズマなんですかこれは！新手のプロポーズですか！」
「そ、そうじゃない！ここだ！ここ」
俺が指さした先を見て、少し落胆しつつもめぐみんは名前を書い

た。
「あのこれは誰のやつですか？相手の保証人の名前が全く知らない名前なのですが」
「ダクネスのだ。相手は前にお見合いしたバルターって貴族だ」
イグニスさんから急に呼び出されて、ウチの子を貰ってくれって言われた時は驚いた。
拒否したらあっさりと引いてくれて、だったらウチの子のお見合いを成功させて欲しいって言われて、一杯食わされた。
後から聞けば、最初から断るのは予想していたらしい。
「ちょっと待ってください。この話、ダクネスは知ってるんですか？」
「知らないぞ。でもな。お前もバルターの噂は知ってるだろ？あいつはその噂通りのやつだし、ダクネスに惚れてるから問題ないって」
「ですが好きでもない人と結婚と言うのはどうかと」
恋敵が減るって喜べばいいのに、めぐみんって本当に仲間思いだよな。
「そうは言ってもなあ。俺が言うのもなんだが、ダクネスの好きな人って俺だぞ」
めぐみんがちょっと不機嫌になってるのが分かる。
でもそれも可愛い。
「この話を無かった事にしたら俺らまた進展が遅くなるかもしれないぞ」
何言ってんだ俺？
言いたかった事と違うんだが。
ってこれじゃあプロポーズとさして変わりないだろ！
「ふん！しょうがないですね。カズマに付き合ってあげますよ」
はい、ツンデレ頂きました。
ご馳走様です。
「何ですか！そのにやけ顔は！私に喧嘩売ってるんですか？なら買いますよ！」
「ちょっ落ち着けって。そろそろダクネス達戻ってくるから」
丁度言い切った辺りでダクネス達は戻ってきた。

めぐみんはカッと睨み付けてからダクネスの方を見た。
「なあ、やっぱりこれは私には似合ってないと思うのだが。二人もそう思わないか？」
「「似合ってる」」
思ってる事をそのまま言ったらハモった。
まあ、実際似合ってるから当然かもな。
「うっ、これは私の好きな攻めじゃない！」

パーティーは終わり片付けを始めている中、ダクネスを呼んで二人で話をしている。
「この後、そのまま二人で外に出るけどいいか？」
「私はいいが。大丈夫なのか？」
「めぐみんの事か？俺とあいつは付き合ってないし文句言われねえって、それに話は付けてるし」
そう、魔王討伐前にめぐみんが言ってた凄い事が出来るかもしれないのに、こっちを優先してるんだ。
そこら辺は察して欲しい。
「そ、そうか。ならいいのだが」
「じゃあ行くぞ。向こうも待ち侘びてるだろうし」
親父さんとバルターは今頃、まだかまだかと待っている頃だろう。
「誰かを待たせているのか。では急ごう」

そしてダクネスの実家に到着した。
「カズマ。如何して此処なのだ？よく分からないのだが」
「これの話するからだ。時期に分かる事だし気にする事ねえって」
めぐみんの名前入り、結婚届を渡して言った。
「中に入ったらそれに名前書いとけよ。後で俺も名前書くから」
ダクネスが結婚届に困惑している中親父さんは出てきた。
「よく来てくれカズマくん！さあ、早く中に入ってくれたまえ」
「ありがとうございます。ほらダクネス行くぞ」
「えっ、嗚呼、今行く」

この後二人は別室に案内された。

俺の通された部屋は裏出口のある部屋だった。

着いてから数分経ちメイドと騎士がやってきた。

「結婚届をお持ちしました！」

「ありがとう。ちょっと待っててくれ」

二人は大人しく待っていた。

にしても我ながら最低だとは思うが、これもダクネスの為だし、仕方ないよな。

「出来たぞ。今日はありがとう。後の事は頼んだ」

「いえいえ、サトウ殿。こちらこそ、お嬢様をありがとうございます。こちらから外に出られますのでご安心を」

確かこの騎士って昔からダクネスの面倒見てた人だよな。

あれだけアルダープとの結婚については嫌そうにしてたのに、やっぱりちゃんとした人と結ばれて欲しいと思うのは皆、同じなのだろう。

「いやあ、助かるよ。今日は帰れないって思ってたからさ。あっ、これバルターに渡しといてくれないか、ウチの仲間が調べた。ララティーナの好み集だから参考に使って欲しいって伝えてくれ」

「畏まりました！それではお元気で」

こうして俺のミッションは完了した、

翌日、俺がダクネスによってボコボコにされるのはまた別の話である。

新たな導き

《ｆｏｎｔ：ｕ３３》―ＡＲＡＴＡＮＡＭＩＴＩＢＩＫＩ―《／ｆｏｎｔ》

二ヶ月前には、ダクネスの誕生日パーティーと婚約騒動があった。

あの日カズマから結婚届を貰った時は、胸が踊ったが直ぐに自分達の物では無いと分かり落胆した。

ヘタレなカズマに期待した私が馬鹿だった。

因みにダクネスはと言うと翌日、朝一番にやって来た。　そして、カズマを取り押さえ、袋叩きにしていた。

ダクネスから聞いた話によると結婚届はお父さんが預かり、一先ず婚約と言う形で止まったらしい。

バルターのダクネスへの想いは本物で、両家共に乗り気だった為、ダクネスもきっぱり断り切れなかったと言う。

とは言え、あたかも自分との結婚の書類かのように署名させたクズマに対する怒りは収まらなかった。

一ヶ月間お互いに何も話さない程に。

そんな中、私がこれ幸いにとデートを繰り返していると、ダクネスはある日接触を試み、そこからまたいつも通りの何の進展もない日々が始まってしまった。

魔王討伐から数ヶ月も経ったと言うのに、あの夜の約束は未だ果たせていない。

原因は様々、アクアが何かをしでかす。　ダクネスの妨害、カズマがヘタレる、私がヘタレる。

そんな事が続いて、今日まで来てしまった。

最近、アクアの行動も少し怪しくなってきている。

何というか気持ちには気付いていないけど、カズマを好きなんだろうなと言った感じだ。

あとゆんゆんはその気はないだろうが、一緒にクエストを受ける回数が増えているから、気を付けなければならない。

何故なら、カズマがゆんゆんにだけは、優しいからだ。

理由を聴いても、そんなの当たり前だろと言われるだけで、全く意味が分からない。
私の気持ちなんか知らず、ただ待遇改善を求めているだけだと思っているのだろう。
他にも勇者カズマに擦り寄ろうとする他所の者冒険者がよく来ているが、それは何とか牽制している。
って今は恋敵の話をしている場合ではなかった。
カズマの誕生日プレゼントを何にするか決めないと。
と思い立つと同時に、先程別れたばかりのカズマを見つけた。
カズマは何かを警戒する様にキョロキョロ周りを確認して、とある店に入っていった。
もしかすると義賊の活動の会議をしているかも知れないと思い、後を付けて入店したのだが……
「『スリープ』ッ！」
入るなり何者かによって眠らされた。

目が覚めるとこめっこに餌付けしていたお姉さん達が居た。
「あの、此処は何処ですか？と言うかあなた達は何者で今の私の立ち位置ってどんな感じなんですか？」
拘束はされてないとは言え、一度眠らされて居るのは不安材料だ。
「暴れたり私達と常連いえ、カズマさんに危害を加えないと約束して頂けるなら、包み隠さずお話します」
「・・・分かりました」
何となくだけど、お姉さん達を見る限りこの店がどう言う店なのか分かってきた。
此処は、
アレだ。
風俗だ。
だからお客であるカズマにバレた事を知られないようにしているのだろう。
「まず、私達が何者かについてですが、実はサキュバスなんです」

「そうですか。カズマがいつもお世話になって?あの、今サキュバスって言いませんでしたか?」
「はい」
はい?
如何してサキュバスがこんな街中に、お店を構えてるんだろう。
いや、それを言ったらウィズの店も一緒か。
でも、こんな店に通ってるなんて、カズマに危害を加えないって言った事を後悔し始めている。
「自分で言うのもなんですけど、驚かれないのですね」
「リッチーと悪魔の経営する魔道具店を知ってますから」
「バニル様を御存知なのですか!」
バニル様?
それに何だろう急にお姉さん達の目の色が変わった。
カズマの話をしているアイリスの目に近い。
「ええ、私がバニルの残機を減らした訳ですし、その後もウィズの店でよく会ってますよ」
「バニル様の残機を減らした!?めぐみんさんどうかこの店をお見逃し下さい!!」
流石地獄の公爵。
バニルを倒したってだけで、ここまで畏怖されるとは。
でもまだ名乗りもあげてないのに、如何して私の名前を知っているのだろう。
「カズマさんの夢をめぐみんさんのモノだけにしますのでどうか」
?
夢?
「あの、夢ってなんですか?ここって風俗店じゃないんですか?」
「違いますよ。ここは男性に夢を提供するお店です」
「やっぱり風俗なんですね」
何処からどう聞いても風俗だと思う。
それに、こんな事よりカズマと話し合いたい。
「違いますって。就寝後に夢を見させる魔法を使って、お客様の望む

夢を提供しているのであって疚しい事はしてません。あっ、これはカズマさんが今日注文された夢の内容です」
言われて渡された物はカズマの字で書かれたアンケート用紙のような物だった。
サキュバス達はこの紙に最後の希望を掛けたかのように私を見ていた。
兎に角、内容を見てみよう。

名前　　：サトウカズマ
相手の名前：めぐみん
相手の設定：本人
好感度　　：いつもの
状況　　：アクシズ教徒の居ないアルカンレティアで結婚旅行。

……

「カズマは何処にいるんですか！今からギュッとしに行くので、場所を教えてください！」
結婚した後の事を考えてくれているなんて凄く嬉しい。
「おおお、落ち着いてください！カズマさんはもう帰られたので居ないです」
「そうですか」
ここまでカズマに会いたいと思った事はない程に会いたいのに。
会いたい時に、会えないというのが辛いモノだと分かった。
「そう言えば夢を私のだけにすると言っていましたが、他の誰かの時もあるんですよね？それも見せてください」
嬉しさのあまり忘れていたけど、ちょっと冷静になると気になって来た。
「すみません。仕事が終わると同時に全て廃棄しているのでお見せする事は出来ませんが、担当の者を呼んでくるので少々お待ちください」

そう言って一人が出て行った。
そして数分後、何処かで見た事のある私と同じくらいの体型のサキュバスの子が居た。
「あっ！アナタは最近ゆんゆんとよく居る子じゃないですか！」
どうしよう。
我が自称ライバルにまともな友人が出来たと思っていたらサキュバスだったなんて。
「はい。ゆんゆんさんとは仲良くさせて貰っています」
この子がゆんゆんと仲良くなってから、ゆんゆんが家に来る回数が減ったのだ。
だからどうという事はないし、面倒事が減って清々している。
「サキュバスの中にもそっちのけのある人がいるんですね」
「ち、違いますよ！ゆんゆんさんとはダストさんの愚痴を話せるので、仲がいいだけです」
成程、ゆんゆんの意中の人について語れる相手と言うなら納得だ。
そう言えばこの噂は本当なのだろうか？
もし本当なら族長の為にも目を覚まさせないといけない。
でも、カズマに頭撫でられた位で顔真っ赤にして、あたふたしてるゆんゆんがそんな事ない。
と思いたい自分がいる。
「えっと、その。御屋敷ではお騒がせしてすみませんでした」
確かに屋敷にサキュバスが来て、ちょっとした事件になった日もあった。
偽名だろうけど、ロリーサとか言った子は申し訳なさそうにしていた。
「いえ、大丈夫ですよ。その前に幽霊騒ぎで怖い思いをしてましたし」
私が気にしていない事を伝えるとロリーサは頭を下げて、再び謝っていた。
・・・と言う事はもしかして！
「確認ですが、あの時カズマにチャームとか使ってないですよね」
「えっと、そうですね。お恥ずかしながら、カズマさんの元に辿り着く

前に結界に捕まってしまったので」
　予想通り、カズマのあの行動は自発的なモノで、ダクネスとの混浴は夢だと思い込んでいたのだろう。
　屋敷に帰ってから問いただそう。
「分かりました。では本題に入るのですが、カズマは最近私以外の誰の夢を見ましたか？」
「他の方ですか？ここ数ヶ月はめぐみんさんの夢だけですよ」
「ほほほ本当ですか！」
　つまりカズマが真剣に私の事を考えてくれてるって事で。
「ええ、ただ最近はデート前の確認やデート後のおさらい、プロポーズの練習、結婚式の模擬体験と言った感じで精気を吸えない日が多いですね」
「あのやっぱり今から追いかけてでもカズマにハグしに行ってもいいですか？今日の分はキャンセルで私がカズマの相手してきます！」
　カズマの書いていた新婚旅行プランに近いやつならば、アルカンレティアじゃなくても出来る。
　知り合いの居ない街に適当にテレポートして、過ごせば完璧！
「ままま待ってください！カズマさんにはお代を貰っていますし、そういう訳にはいきません」
「・・・そうですか。カズマの興味が私以外に向いてないのが分かって安心したので、大人しく帰らせてもらいます。此処をどうするかは保留という事で」
　カズマは外泊か。
　下手すると帰る頃にはもう居ないかもしれない。
　早く帰ってカズマを少しでも長く見よう。
　もし、さっきまでの話が嘘ならここは爆裂の対象にしよう。
「あ、あの。お詫びと言ってはなんですが、今日カズマさんはこの宿に泊まっているので、その近くに宿を取って教えて貰えれば、めぐみんさんの望む夢をお見せしますよ。勿論、宿代はこちらで持ちますので」
　何を言い出したのだろうか、このサキュバスは。

私がそんな甘言に騙されるとでも？
見くびられては困る。
そう、ここは堂々としていればいい。
何も悩む事などないのだ。
「望む夢とか言われてもですね。分からないので詳しくお願いします」

「――と言った感じでお願いします」
「分かりました。では最後に注意事項なのですが、今日はお酒を飲まないようにしてください。飲酒後に深い眠りにつかれると夢を見させられないので」
成程、だからカズマは霜降り赤蟹を食べている時にお酒を飲まないようにしていたのか。
これであの時、カズマの様子が少しおかしかった謎が解けた。
「大丈夫です。私お酒飲まないので」
飲んでみたいとずっと思っているが、十五になった今も飲ませて貰えない。
誕生日以降、カズマから止められる事は少なくなったが、未だにダクネスにお酒に規制を掛けられているのだ。
最近はカズマがこっそり飲ませようとしてくれるとはいえ、ダクネスに悪いので断っている。
「では、最後に確認ですが、隣の部屋もしくは真上、真下の部屋を取ってくださいね。それが出来なかった場合は二個目のプランになります」
「問題ありません。もし埋まっていたとしても隣の部屋を手に入れてみせますよ！」
いざとなれば虎の子を使って買収すれば良い。
それでも無理なら……
「暴力沙汰はなしでお願いしますよ」
「わ、分かってますよ。今日はありがとうございました。ここの事は黙っておくので、その代わりにカズマが他の女の夢を見ようとした時

は連絡お願いします。後、今日はよろしくお願いします」
「こちらこそありがとうございます。宿のご連絡お待ちしております」
カズマの外泊が遊郭に行っている訳じゃないと言う安心材料も得られたし、何よりカズマの気持ちも知れたしで今日は別行動にして良かった。

「あれ？カズマと爆裂しに行ったんじゃなかったの？」
カズマのプレゼントを探そうとしていた矢先にアクアに遭遇した。
「はい、今日は街に用があったので、ドレインタッチで動けるようにして貰ったんです。アクアは買い物ですか？」
街まで爆音が響いていたから不思議に思ったのだろう。
「そうよ。でも珍しいわね。最近カズマにおんぶして貰う楽さを覚えためぐみんが自力で街を歩いてるなんて」
アクアが私の事をどう思って居るのか今のでよく分かった。
私が最近覚えたのはカズマにおんぶして貰える幸せだと言いたいけど黙っておこう。
訂正するのも面倒だから要件だけを言う事にしよう。
「私の目的はカズマの誕生日プレゼント探しです。ですので一人で行動しています」
「そう言えばそうだったわね。まあ、カズマの誕生日だし適当に選べばそれでいいわよ」
なんともアクアらしい助言だった。
初めから期待はしていなかったけど。
「そんな事ばかり言ってるからカズマに怒られるんですよ。今からウィズの店に行こうと思いますがアクアはどうしますか？」
「今から教会に行って神のお告げをしに行く所よ。カズマのプレゼントはそのうち適当に買っておくわ」
アクアはそう言って教会に駆けて行った。
カズマにあまり行くなと言われていたと思うけど、まあ、アクアの

至福のひと時を奪うのも悪いので、黙っておこう。

アクアに言ったようにウィズの店に来ていた。

色々と見てみたけどこれという物も無くウィズと世間話をしていたのだが。

「これはこれは想い人の秘密と気持ちを知り、舞い上がっている娘ではないか。小僧への贈り物で悩んでいるのならこれがお勧めである」

バニルが戻って来た。

要らない事まで言った所為で、ウィズの目が輝いている。

「はあ、所でこれは何ですか？」

バニルが渡した物は平べったい、長方形の板だった。

「我輩も詳しくは知らんが小僧が使い方を知っていて、喜ぶのは間違いないと確証しよう」

「分かりました。そこまで言うなら買います。それでこれは幾らですか？」

カズマが喜ぶなら幾らでも出す。

「十億エリスです」

「・・・ウィズすみません。よく聞こえなかったのでもう一度お願いします」

十億エリスって聞こえた気がするけど、多分万と聞き間違えたのだろう。

「十億エリスです。十億」

「ちょっと待ってください！こんな板に十億エリスなんて誰が払うんですか！十億出したなんて言ったらアクアみたいに怒られますよ！」

魔王討伐の報酬で買えない事もないけど、こんな板切れに十億も払う馬鹿はアクアぐらいだと思う。

「ふむ、確かに狂犬女神なら即決であろうが、使い方を知っているが故の行動であるな。一つ助言するのであれば、数日後この場に婚約を押し付けられた娘が来るは…」

「分かりました！買います！是非とも買わせて頂きます！」

ダクネスに渡るくらいなら後からカズマに怒られる方がマシだ。

「では分割利子なしでどうか？」
「それでお願いします。お金はカズマに預けているので、怪しまれますからね。助かります」
まさか貯金制がここに来て裏目に出るとは。
「非常に壊れ易い物であるから気を付ける事だな」
「はい！」
こうしてカズマのプレゼントは決まった。
でもあの悪魔に言われた物をそのままと言うのも気が進まないから、誕生日までに何か考えておこう。

無事に隣の部屋を手に入れた私はロリーサに連絡し、現在待機中だ。
アクアやダクネスにはゆんゆんとお泊まり会だと言って来たので、少し罪悪感がある。
でも、ここまで来たのだから、カズマや他の男性冒険者が病み付きになる夢を見てみたい。
そして、夢の中でカズマと・・・
「今日のめぐみんはどんな感じの服だろうなっ！」
何故かカズマが部屋に入ってきた。
あ！鍵閉めるの忘れていたからだ！
私とした事がなんと言う失敗を。
ベッドの上に居たから取り敢えず、眠っているフリをして乗り切ろう。
「ななな何でめぐみんが此処に!?ま、まさかもう夢なのか？でも、今日はアルカンレティアのはずだし・・・　あれ？」
カズマは凄く動揺しているようだ。
慌てているカズマの顔が見たいけど我慢、我慢。
「あっ、ここ隣の部屋か。でもめぐみんがここに居るって事はバレてるんじゃ。今日はキャンセルした方がいいな」
不味い。
折角の計画が水の泡になってしまう。

一か八かやってみるしかない。
バレたら、バレたで問題は無い。
ただ、その時はカズマに詰問するだけだ。
「かずま・・・どこに泊まっ……」
「・・・何だ偶々隣に泊まってただけか。焦った。明日はバレないように遅めに出よう」
ふー。
何とか乗り切れた。
さて、後は寝るだけだ。

どんな感じなのか楽しみで寝ようと思えば思う程、逆に目が冴えてしまってなかなか眠れない。
少しウロウロして、ベッドに入ったり、夢の事を考えたりして過ごしていた。
そんな事を繰り返している内に、気付けばアルカンレティアに居た。
「めぐみん、お待たせ。ちょっと準備に時間が掛かってな」
呼ばれた方を見るといつもの服装とは違うカズマが居た。
凄く私好みの服装だと思う。
「私も今来た所ですよ。あの、今日は何処に行くんですか？」
「まあ、色々な。そうだ、今日の服も似合って可愛いぞ。綺麗だ」
誰だろうこのイケメン。
こんなにストレートに褒めて貰えたのは、初めてで如何したらいいのか分からない。
「あ、ありがとうございます。か、カズマもその服似合ってかっこいいですよ」
「そうか？めぐみんにそう言って貰えて、選んだ甲斐が有るってもんだよ」
いや、本当に誰？
こんなプレイボーイな感じの人知らない。
「何だ？照れてんのか？照れてるめぐみんも可愛いな」

あああああああ!!
もう何だろう！
心の底から爆裂しそうな感じに悶えたい。
駄目だ言葉に出来ない。
カズマがカッコよすぎる。
と言うかカズマがヘタレなかったらこんなに嬉しい事言ってくれるなんて、付き合ったら私はどうなってしまうのだろうか。
「めぐみん？そろそろ行こうぜ。回れる場所が少なくなっちまう」
私は何も答えずにただ、カズマの後に着いていくだけだった。

この後、カズマと色々な所を回り、ハネムーンを満喫した。
思っていた以上にサキュバスの夢は凄かった。
何がとは敢えて言わないが、兎に角凄かった。
カズマがシュミレーションの為に通うのも頷ける。
これは癖になるやつだ。
カズマの誕生日のシュミレーションをこれでいくつか済ませよう。

カズマの誕生日前日。
ギルドで、カズマを待っているとクリスに会った。
「カズマの女のめぐみん久しぶり！元気だった？」
「久しぶりですね。この前はありがとうございました。クリスこそ大丈夫でしたか？」
あの活動のある日はカズマから話を聞いているから、最近活動が増えて、忙しい事は知っている。
カズマがブラックなんちゃらと言うくらいに。
「うん。私は大丈夫なんだけど・・・」
？
何だろう？
何も変な事は言ってないないのだが、クリスから引いた様な表情が見て取れる。

「めぐみんって、やっぱり凄いね」
「急にどうしたんですか？褒めても何も出ませんよ」
なんの脈絡もなく褒められては警戒して当然だ。
まさか、カズマと隣国へ盗賊活動に、二人で行くなんて言い出すのではないだろうか？
「いや別にそういう訳じゃなくて、ほら、カズマの女って言われてもそのまま受け入れてる所とかね？」
「はあ？カズマは私の男ですよ？その逆を言われて、如何して私が動じるんですか？」
クリスはやはり疲れているのだろう。
思考回路が働いていない。
「え？今のあたしがおかしいの？もしかして、二人ってもう付き合ってるの？」
「まだですよ。今は仲間以上恋人未満の関係です」
単純に私達の関係を知らなかっただけなら仕方ない。
クリスにしては、情報に疎いのが珍しい。
「そ、そうなんだ。前にも聴いたけど、めぐみんはカズマの事どれ位好きなのかな？」
クリスは少し顔を赤らめながら興奮気味に聴いてきた。
「どれ位好き、ですか。厳密に言うとカズマの事はもう好きではないですよ」
「・・・ちょっ！ちょっと待って！めぐみん何があったの！」
急に騒がしくなるクリス。
顔面蒼白と言った感じでキョロキョロ周りを見たりして、挙動不審だった。
「どうかしましたか？続きを言いますよ？」
クリスは返事をするでもなく、黙って話を聞き始めた。
私が直ぐには話さなかったので、気まずくなったのかコーヒーを飲み始める。
「今、私はカズマを愛しています」
「っ！コホッ、コホッ！」

私が言い切ると同時にクリスは口の中の物をぶちまけた。
「大丈夫ですか？無理しない方がいいですよ」
「だ、大丈夫。大丈夫なんだけど。やっぱりめぐみんは大物だよ」
今日のクリスは私を煽ててどうしようというのだろうか？
「あっ、カズマには言わないでくださいね。まだ好きとしか言っていないので、お願いしますよ」
もし、カズマに知られたら恥ずかしさで悶えると思う。
「い、言わないよ。と言うかこっちが恥ずかしくて言えないってば」
からかった後のカズマみたいに抗議をしてくるクリス。
何と言うか二人が急に仲良くなった理由が分かったかもしれない。
「・・・じゃあさ、もしカズマくんが付き合ってって言ったら何て答えるの？」
「そうですね。『結婚ならしてもいいですよ』と言いますね」
今更恋人になっても特にやる事は変わらないと思う。
デートはほぼ毎日していた時期もあったし、一緒に寝たりもしているのだから。
確かにキスとかはまだちゃんとしていないとはいえ、結婚すれば普通に出来る事な訳で、早いか遅いかの話で言えば、結婚した方が、色々やり易いと私は考えている。
「へ、へぇー。分かったよ。私はもう何も言わないから大丈夫だよ。でも私はダクネスを応援してるから、今日のは敵情視察って所だね」
クリスが敵に回るとは、少し厄介だ。
でも、私にだってゆんゆんがいるのだから焦る事はない。
・・・クリスが敵？
「あの、一つ確認なんですが、神器を使ってアクアにも解けない呪いをカズマに掛けていたりしないですよね？」
「え？勿論そんな事してないよ。ねえ、呪いってどういう事？それにアクアさんに解けない呪いなんてないと思うんだけどなあ」
嘘を言ってる感じもなく、他の人と同じく呪いは掛かっていないだろうと言った感じだ。
ただ、他の人よりも断定的な印象を受けたのは気の所為だろうか？

「まず、幾らダクネスを応援しているからと言って二人の邪魔をしたりする訳ないよ」
「そうですか？私達がいい感じになると何かが起こって困っているのですが、運が悪いだけなのでしょうか？」
　これには本当に迷惑している。
　折角カズマがやる時はやるモードになってあと少しだって時に限って邪魔が入るのだ。
「そうだと思うな。それにそんな嫌がらせの出来る神器なんて聞いた事ないからね」
　クリスがこう言うなら、やはり私達の恋愛運がないと考えるしかないのだろう。
「そうですか。そう言えばクリスは明日空いていますか？明日のサプライズゲストとして来て貰えると助かるのですが」
　今の状況からはきつそうだけど、クリスが来ればカズマも喜ぶだろうし、クリスも息抜きになっていいと思う。
「ごめん。その日は用事でお祝い出来なくて、初めに言えば良かったんだけど、今日はそれを伝えようと思ってギルドに来たんだよ。勿論、助手くんへのプレゼントは用意してるから代わりに渡して貰えないかな？」
「そういう事なら仕方ないですね。任せてください」
　こうして、クリスからカズマへのプレゼントを貰った私は当初の目的など忘れて帰宅した。

　誕生日当日。
　カズマはいつも通り、朝食の時間になっても起きてこなかった為、準備は簡単に済んだ。
　朝食を作り終えたことで仕事の無くなった私が起こす役に遣わされたのだが、一向に起きない。
「カズマ起きてください！朝ですよ！」
「母さん、もうちょっと寝させてくれ、・・・」
　寝惚けているカズマに見惚れそうになるのを耐えるのに必死だっ

た。
「カズマ！私はお母さんじゃないですよ！ほら早くしてください！」
布団を翻して起こそうと思ったけど、カズマの誕生日に喧嘩はしたくないと思ってやめた。
こうなったら色仕掛けでいこう。
「カズマ起きてください。今起きたらおはようのキスしてあげますよ」
私が言い終わると同時にカズマは布団から出た。
そして、私の顔を見て、顔を赤らめたかと思うとまた布団に入って言った。
「めぐみん、今のは違うからな。偶々目が覚めただけで、キスにつられて起きたとかじゃないからな！」
バレバレだけど、ヘタレてこんな言い訳するのもカズマらしいと言えばらしいのかもしれない。
「そういう事にしてあげますから早く起きてください。みんな待ってますよ」
「分かった。着替えるから先に行っててくれ」
従うように部屋から出て、移動はせずに部屋の前で待つ事にした。
カズマはこう言う時に二度寝したりするから、鵜呑みにしてはいけない。

数分後着替え終わったカズマが出てきた。
「今日の朝食って誰が作ったんだ？」
「私ですよ。カズマが好きなの作りましたから、楽しみにしてくださいね」
今日の為にわざわざクリスに頼んで、ニホン料理の上手い人を紹介して貰ったのだ。
いつもカズマが教えてくれるのとは違うけど、ニホン人なら嫌いな人は居ないと言われた料理を習った。
試作段階の味見で、アクアの評価も良かったし、自身はある。
「俺の好きな料理って何だ？まあ、めぐみんの作る料理なら何でも好

きだけどな」
「そ、そうですか。ありがとうございます」
不意打ちでこんなに嬉しい事を言われると反応に困る。
にやけ顔になってないか心配だ。
「何が出るか楽しみだな」
自覚してないのが、唯一の救いかもしれない。
確信犯だったら、追及されているだろう。
いや、カズマにそんな芸当は出来ないか。
「なあ、今何か失礼な事考えてなかったか？」
「そんな事ないですよ。さて、着きましたよ。どんな料理か確かめてください」
都合よくリビングに到着したので、話を逸らせた。
「期待値高くなってるけど、大丈夫だよな？」
「大丈夫ですから開けてください」
カズマがそう言って扉を開けると、クラッカーの破裂が響くのではなく、乱闘が繰り広げられていた。
「ダクネスそっちに行ったわ！早く捕まえて！」
「し、しかし今離すとまた面倒な事に・・・くっ、カズマはまだなのか」
二人が翻弄されているのは・・・
「ああっ！ゼル帝ダメよ。それはカズマさんの分だから！もし、それを食べたらあなたがお肉にされちゃう！」
「いつもは大人しいと言うのに今日はどうしたのだちょむすけ。しかしこうやって猫に引っ掻かれて傷付くのもまた良いな」
私の作った料理を狙っているペット達だった。
「なあ、もう一回寝てきてもいいか？」
「二人が可哀想なので、早く二匹を止めましょう」
さっきまでと変わり、だるさ全開のカズマだった。

私とカズマの二人で二匹を別室に移し、仕切り直してカズマが再び部屋に入った。
「「カズマ、お誕生日おめでとう!!」」

「お、おう。ありがとう」
　さっき入った時にサプライズがもうバレていたので、カズマの反応は何とも言えないものになっていた。
「その、さっきは見苦しい所を見せてすまなかった」
「気にするなって、あればっかりはどうしようもない事だしな。それに俺が一人で起きてたら成功してただろう？」
　まさかサプライズがこんな形で失敗するとは思っても見なかった。
「それで、これがめぐみんの言う俺の好きなやつか。そりゃあちょむすけは特に欲しがるだろうな。ザ和食って感じで焼き魚がついてるし、って！これ納豆か！」
　今まで下がっていたカズマのテンションが急に上がって、私の肩を掴んで確認してきた。
「はい、納豆です。ニホン出身の人に嫌いな奴は居ない食べ物だからと教わって作ったんです！」
「そうか。わざわざありがとう。でも、納豆って好き嫌い別れる気がするんだが？まあ俺は納豆好きだから嬉しいけど」
　聴いてた話と違って、焦った。
　カズマが嫌いな物じゃなくて助かった。
　あの板を除いて今回のプレゼントは朝昼晩の日本食にしようと思っていたから危なかった。
「食べてもいいか？」
「はい、私からの誕生日プレゼントの一つですから」
　あの板も合わせて、昼食のすき焼き、夕食のカレーと言う料理が今回の私からのプレゼントだ。
「一つって事はまだあるのか？」
　誕生日の夕食時のこめっこみたいにカズマは目を輝かせていた。
「それはお楽しみという事で、これはクリスからの物です。今日は来れないと言っていたので、代わりにどうぞ」
「そうか。クリスにはまた礼を言っとかなきゃだな」
　カズマが貰ったものの確認をして、何故か少し顔が引きつって居たように見えた。

「・・・所でめぐみんは何くれるんだ?・日本料理だけでも嬉しいけど、まだあるみたいに言ってたし」
出来れば最後が良かったけど、逆に好都合かもしれない。
最後にこれを出してカズマにさっきみたいな表情をされたら困る。
「それはですね。この板です」
うっ、やっぱりこんな少しひんやりした折りたたみの板を渡すのは恥ずかしい。
「板ってなんだよぉおお!?・めぐみんこれ本物なのか!?・これ貰ってもいいんだよな!」
板を見た瞬間カズマの目の色が変わった。
そして、めったにしない抱擁をみんなの前でされた。
あの悪魔には感謝しかない。
「い、いいですよ。本物かとか聴かれてもよく分かりませんが魔力で何かするものですよね?」
「これ、魔力で動くのか!・ちょっと待ってろよ!」
そう言うとカズマは板を直角に開けて謎の文字板を押して、板に魔力を送っていた。
アクアもカズマと同様にテンションが上がっていて、ダクネスは私と同じく訳が分からず見守っていた。
「よし、開いた!・後はこれをこうして、出来たぞ!」
「カズマ、やったわね!・これで屋敷でもパソコンゲームが出来るわ!」
パソコンゲームとやらはよく分からないが、多分あの板がパソコンでパソコンを使ったゲームの事だろう。
パソコンとか言う板は先程まで黒い板だったのに、光を放っていた。
カズマは色々と確認が済んだのか、立ち上がって言った。
「ありがとう。めぐみん、これいくらしたんだ?・高くなかったか?」
「貰った物の値段なんて気にしないでください。でも、喜んで貰えて良かったです」
この時、私はこの板切れにカズマを奪われるとは思っても見なかったが、それはまた別の話。

「カズマ、めぐみんの物には劣るだろうが、私からはこれだ。いつもありがとう」
「こちらこそありがとう。貰った物に優劣なんて付けれねえよ」
カズマはダクネスを赤面させつつ、中身を取り出していた。
ダクネスのプレゼントはタオルだった。
「タオルか、汗ふきに最近使う機会が増えたし嬉しいよ。ありがとな」
やはり実用性が重視されるのは仕方ない事だろう。
「あっ、私からはこれね。天下のカズマさんなら喜ばないわけないわよね？」
「よし、アクアちょっとこっち来い。話がある。二人はここで待ってくれ」
アクアの渡した物を見て、急に顔色を変えたカズマはアクアを連れて出ていった。
あらかたアクアがカズマの気に触る物を渡したのだろう。
数分後二人が仲良く戻ってきた。
「流石アクア様、神芸でした」
「いやいや、それ程でもあるわよ。カズマさんこそ素晴らしい考えだわ」
何だろう。
二人が仲良くしていて、嫉妬が湧くと言うより単純に二人が気持ち悪いから間に入って元に戻したい。
「めぐみん、あの二人はどうしたのだ？」
「さ、さあ？何か嫌な予感がするのですが、ダクネスはどう思いますか？」
ダクネスに確認しようとした時、アクアに遮られた。
「プレゼント渡しも終わったし、パーっと飲むわよ！」
「じゃあ、この酒から行こうぜ。これ美味しやつだから」
「そうね。・・・ねえ、カズマさん。そのお酒は何処から持って来たのかしら？私の部屋に有った物に凄く似ているのだけど」
「その通り、お前の部屋のやつだ。酒買うなって言ってたのに部屋にあったから持ってきた。今日はみんなありがとうわっ！アクア何す

んだよ！危ないだろ」
　アクアは高級酒を取り戻そうとするも、いざとなれば割ろうとしているカズマに強引に近付く事も出来ず、攻めあぐねていた。
「私のお酒返して！それは信者の子がくれたやつなの！そうじゃないとさっきのフィギュアの話二人にもするわよ！」
「あ、アクア何言ってんだ。後から同じの買ってやるに決まってんだろ。何ならこの前欲しいって言ってたのも買ってやるぞ」
　カズマが急に手のひら返しを始めた。
　フィギュアってどんなものだったけ？
「流石カズマさんね。分かってるじゃない。サービスしてオプションを増やしてあげるわね」
　オプション？
　どこかで聞いた事があるような。
「アクア様マジ女神！」
「カズマもようやく分かってきたようね。カズマには特別にアクシズ教の幹部になれる権利を授けるわ」
　アクアは煽てられて、得意になっていた。
「いや、それは要らない。それより、ちゃんとあれ作ってくれるんだよな？」
　アクアはカズマに即断され、少し落ち込んで居たが、カズマ相手に泣き落としの意味がないのを理解しているのか、我慢して、話を続けた。
「勿論よ。色んなバージョンを作ってあげるから期待してもいいわよ」
「あの、ちょっといいですか？二人の言ってるのって前にアクアが作ってた人形じゃないですよね」
　私の質問に黙り出す二人。
　図星と言った所だろう。
「ち、違うわよ。私たちは別にミニめぐみんを作ろうなんて考えてないわよ！」
「はぁー、こいつの言う通り、前にアクアが作ってた改良型を作って貰

う話だったんだよ」
「ちょっと！カズマ！バラしてどうするのよ！」
「お前がバラしたようなもんだろ！折角、いい娯楽ができたと思ったのによ」
「喧嘩は辞めてください！と言うか二人には話があるので、来てもらいますよ！」
二人はぶるぶる震えながら、私に着いてきた。
移動後、カズマは誕生日だった事もあり、あまり怒らなかったが、アクアには変な物を作らないようにキツく言っておいた。
この後は特に事件もなく、楽しい一日を過ごす事ができた。
一つ心残りなのはカズマにカレーとすき焼きを出す順番が逆だと言われた事だ。

分からぬ思い

《ｆｏｎｔ：ｕ３３》―ＷＡＫＡＲＡＮＵＯＭＯＩ―《／ｆｏｎｔ》

「カズマ・・・！　カズマぁっ！あなたの事が、大好きです！愛しています！」

荒い息を吐きながら、俺に必死でしがみ付くめぐみん。

そのめぐみんの下半身からは、時折湿った粘液の音。

「お、俺も・・・・・・！　俺も、めぐみんが好きだ！愛してるっ！」

同じく荒い息を吐き、めぐみんへ言葉を返す俺。

薄暗いこの空間で愛を語り合う二人。

申し訳なく思いながら、めぐみんに俺は言う。

「ダメだ！めぐみん、俺もう限界で、もう我慢できない・・・・・・！

もう出るっ！」

「待ってくださいカズマ！お願い、お願いですカズマ！一緒に・・・！

はあ・・・はあ・・・、い、いくなら、私も一緒にっ！」

めぐみんは俺を離さまいと掴む手に力を込める。

「・・・もう限界だって！俺、もういくから！　そ、外に・・・外に出させろ・・・っ！」

「待って！　カズマ、このまま！　このまま、中にっ！」

俺の腰には精一杯、力を込められためぐみんの手が。

俺は・・・

俺は！

遡る事半日。

パソコンゲームして過ごす日々。

なんて最高なんだ！

パソコンと引き換えに楽しい冒険者ライフとか、訳の分からない詐欺に遭ったからもう会う事はないと思っていたが、めぐみんには感謝しかない。

あれからはちゃんと早起きして、日課に付き合っている。

にも関わらず、最近めぐみんの機嫌が悪い。
理由を聴いても何でもないと答えるだけだが、絶対何かあるはずだ。
あとめぐみんの機嫌が悪いと言えば、この前ゆんゆんの夢を頼んでみたら翌日、恐ろしく光った目をしためぐみんが玄関で待っていた。
何も言わなかったが、あれバレてるよな。
俺が夢を頼んだ後のあいつのテンションがちょっと高めになるあの現象も説明がつく。
あの店で直接聴くのもあれだし、次はめぐみんとイチャイチャするだけの頼んで確かめてみるか。
でもこの予想が当たってたら俺の気持ち全部知られてるって事で・・・
って色々まずいぞこれ！
俺の立てた告白の計画は全部知られてるし、サプライズの意味皆無だぞ！
どうしよう。
新プランを演習なしで作らないとだし、気付いた事悟られないようにしないと。
それに気付かれたら詰問と共に罰として夢でやった事させられそうだ。
それだけは何が何でも避けなければ。
「カズマ！カーズーマー！聞いてますか！」
「うわっ！急になんだよ。てか何時からそこに居たんだ？」
こいつ索敵スキルに反応しないから厄介だ。
敵じゃないから当然な訳だが。
「カズマが白い顔しだした辺りです。そこからずっと呼んでいたんですよ？」
「そうか。悪かった。ちょっと考え事しててな」
声に出てなくて助かった。
「また商談ですか？それとも縁談？何方にせよ、あまり根詰めないようにしてくださいよ」

いい感じに勘違いしてくれてるな。
ここは乗っかっておこう。
「心配かけてごめん。明日には終わるから大丈夫だ」
「何水臭い事言ってるんですか。こういう時こそ私を頼ってください」
うっ、急に罪悪感が。
純粋に心配してくれてるのに、隠し事してる自分が情けない。
この際謝っとくか？
引きずるのも良くないしな。
よし。
「今日は何処に行く予定なんだ？」
「ニホンです」
帰郷か。
それもいいな。
・・・ニホン？
「・・・今なんて？」
「ニホンです」
やっぱり日本だった。
でも帰る方法なんてないし、こいつは何言ってんだ？
それに今思い出したが、今日はアクアの誕生日会の話をする予定だったはず。
「カズマの故郷ですよ。これで分かるでしょう？我が家は諸手を挙げて賛成してますが、カズマの方はまだ確認してませんからね」
「いや待て。日本に行くって言っても行けないだろ。それになんの確認だ？」
「何って結婚に決まってるじゃないですか。移動手段はアクアが転移させる手筈を整えてますよ。と言うか発案者はあなたでしょう」
結婚・・・
何となく読めた。
これは夢だな。
ただ問題があるとすれば、昨日あのサービスを受けてないって所

だ。
「悪い、寝惚けてた。それじゃあ行くか」
「ふふふ、カズマのご両親に会うのが楽しみです」
色々不安はあるものの、嬉しそうに笑って出て行くめぐみんを見ながら、俺も外に出ようとしたその瞬間。
「起きてください！朝ですよ！爆裂が私を待っているのですよ！」
アクアでもダクネスでもなく、めぐみん本人によって俺とめぐみんの幸せな時間は奪われた。
「お前ふざけんなよ！いい夢見てたってのに、起こしやがって！」
「なっ！何ですかそれは！それにいい夢って何ですか？そこの所を詳しく」
「お前と日本に帰って、る話だ」
危ねえ。
全部話す所だった。
「そ、そうですか。今から寝てもいいですよ？」
「それ意味ないだろ。爆裂がお前を呼んでるんだろ？飯食って行くぞ」
「あっ、待ってください」
・・・ここ最近のツンとした感じがない。
まさかこれも夢とかそういうパターンか？
頬を抓ってみる。
普通に痛いじゃねえか！
「如何したのですか？ゲームのし過ぎで頭おかしくなったんですか？」
「なってない。眠気飛ばす為にやったんだ」
この感じは夢じゃないな。
「・・・まだ眠いなら、寝ていても構いませんよ？」
「いや、日課に行くからいいって」
やっぱり怪しいかもしれない。
「では今日の爆裂デートはお昼からにしましょう。それまで一緒に寝るんです」

・・・今なんて？
「寝不足は駄目ですからね。ゆっくり休みますよ」
言われるがままに部屋へ戻り、布団に入ってしまった。
どうしよう。
最近優しくされてなかったから凄く嬉しい。
嬉しいけど、これ寝れないやつだよな。
「腕枕して貰ってもいいですか？」
「嗚呼」
駄目だ。
緊張で目が冴えてきた。
「これして貰うと凄く落ち着きます」
お前はそうかもしれないが、俺は真逆だと言いたい。
「・・・」
寝やがった。
単純に自分が眠かったからとかそう言う理由な気がしてきた。
こいつの寝顔可愛いから憎めないのズル過ぎないか？
「めぐみんが何処に居るかし・・・」
鍵閉めるの忘れてた―！
でもクリスで良かった。
クリス？
「ご、ごめん。この事は誰にも言わないから安心して。先輩の誕生日の事は後でいいからまたね」
最近準備でよく来てるんだった。
てか今更ながらに、この状況のまずさに気が付いた。
「ん？カズマまだ起きているのですか？早く寝ますよ『スリープ』」
「お前何処からそれを、だ、し・・・・・・」
目が覚めるとめぐみんと目が合った。
「おはようございます。丁度、お昼ですし、爆裂しに行きましょう」
「嗚呼。所でさっきのは何だ？」

強制的に眠らせるとか何考えてんだろう？
「・・・カズマがパソコンばかりで寝ていないからですよ。それなのに朝は早いんですから心配なんです」
「それは散歩にだな」
「いつもそうやって起きてくれるのは、嬉しいですよ？ですが、無理している姿を見るのはもっと辛いんです」
うっ、なんて良い奴なんだ。
こんな子が俺の事好きって言ってくれてるんだよな？
よし、今度こそ勇気を振り絞って、
「それに日課が終わるとパソコンばかりで部屋から出て来ないですし、全く構ってくれませし、最近は、誕生日会の準備で会話する回数は増えてますけど、寂しいんですよ？」
いつもより潤んだめぐみんの紅い目が、上目遣いで俺の心に突き刺さる。
「ごめん。楽しくて気が回ってなかった。今日からはちゃんと付き合うから」
「本当ですか？ヒキニートにならないですか？」
「嗚呼。ってヒキニート言うな！」
サラッと毒吐くからやめて欲しい。
・・・って待てよ。
この感じもしかして！
「なあ、ここ最近機嫌悪かったのって、パソコンに嫉妬してたからか？」
「そうですよ。先週までは本気でパソコンと入れ替わる手段はないかと考えていたんですからね」
思ってたのと違う。
もっと照れて否定するとか思ってたのに。
恥ずかしさが急に上がって来た。
こいつ可愛すぎだろ。
ヘタレな自分が憎い。
でも俺そんなに放ったらかしにしてたか？

もうちょっと交流して・・・なかった。
「まあ恋人同士ではないですし、カズマの時間を奪う権利もないですから我慢していたのです」
「・・・めぐみん。俺達」
頑張れ佐藤和真！
お前なら出来る！
付き合ってくれって言うだけだ！
めぐみんの目を見て、このまま全てを打ち明け・・・
「カズマさん助けてください！アクアさんが・・・ごめんなさい。自分で何とかします！失礼しました！」
「・・・」
今度は遊びに来たのであろうゆんゆんに邪魔された。
こんなのばっかりで、もううんざりだ。
「・・・カズマ。今度エリス様に呪いに掛かってないか診て貰って来てください」
「そうだな。ちょっと待ってろ直ぐに戻るから『テレポート』」
早い事終わらせて爆裂デートだな。
「カズマさん。また来たのですね。テレポートで」
「はい、また来ちゃいました」
死ななくてもエリスに会えるのは凄く便利だ。
それにしても初めは緊張し続けてたのに今じゃ慣れたものだな。
「それで今日は何の用でしょうか？」
「俺呪われてないですか？」
アクアには何も無いと言われたが、今日のは露骨過ぎる。
普段家に居ない二人だしな。
予定調和みたいな感じだ。
「？呪いなら先輩に聴けば分かりますよね？如何して此処に？」
不思議がるエリス可愛いな。
でも何故だろう。
今までのようにトキメキを感じない。
「俺最近思うんですよ。エリス様が邪魔しているんじゃないかと」

「してませんよ。それに何の邪魔ですか?と言うか呪い相談と関係ないじゃないですか」
女神は嘘をつく。
アクアを見ていればよく分かる。
これを信じる程俺も馬鹿じゃない。
「俺とめぐみんの恋路です」
「する訳ないじゃないですか!確かにダクネスの応援はしてますけど、だからと言ってそんな馬鹿な事しませんよ!」
などと幸福の女神は供述しており、未だ原因不明のままです。
やっぱりここじゃないのか?
「じゃあ如何して、俺が告白しようとした瞬間にゆんゆんが来るんですか?あれ絶対狙ってますよね!」
「知りませんって!もし仮に誰かの陰謀だとして私ではないですよ!」
この感じだと嘘はついてなさそうだ。
となると依頼しておこう。
「そこまで言うなら誰が犯人か突き止めてくださいよ」
「はあ、分かりました。少し待ってくださいね」
急に立ち上がり何処かに消えたと思ったら直ぐに戻ってきた。
「・・・結果を聞いて文句言わないでくださいね」
「分かりました」
バツの悪そうなエリス。
嫌な予感しかしない。
「色々調べましたが、めぐみんさんのお守りが効力を発揮したあの時を除いては、その、お二人のタイミングが悪かったとしか・・・」
「・・・その情報だけで俺が帰ると思ってます?」
「そう仰ると思って対策を考えました」
流石エリス様!
話が早い。
「お二人の様子を観察し、邪魔が入りそうになれば私が何とかして止めます」

「それは恥ずかしいのですが」
「しかし、これ以外に対策のしようがないので、それこそ情報だけで帰る事になりますよ？」
仕方ないか。
これも進展する為の必要経費。
めぐみんも女神様に見守られてるって言えば安心するだろうし。
「分かりました。さっきの案でお願いします。今日はありがとうございました。それでは『テレポート』」
「了解です。またのご利用お待ちしてます！」
はあ～やっぱりエリス様は可愛いな。

有力情報も持って戻ってきた俺だったのだが。
めぐみんに話せずに居た。
「目の前の女の子放っておいてなんですか。戻って来たら女の匂いがするってどう言う事ですか！」
「落ち着けって！お前が言った通り、エリス様に診て貰って来たんだよ」
自分で提案しておいてどうなんだと聴きたい。
「・・・でどうだったのですか？」
「紅魔伝統のお守りあったろ？あれがってめぐみん何して」
俺が言い切るよりも先に、めぐみんはお守りを壊そうとした。
「待った！待った！それが作用したのは一回だけで他のは関係ないからやめろ！」
「・・・では他のは何だったのですか？」
何とか破壊される事を間逃れたお守りであったが、まだ安心は出来ない。
「エリス様も色々調べたけど、俺らの運が悪か、ストップ！気持ちは分かるけど、逆に呪われそうだからやめろ！」
「・・・」
ただでさえヨレヨレのお守りが絶命寸前で何とか助かった。

「俺だって馬鹿じゃない。ちゃんとエリス様に対策して貰って来たからな」
「ほ、本当ですか！」
凄い食い付きだな。
目が輝いてる。
この状況であれ言い難いな。
「エリス様が俺らの事見守ってくれて、今までみたいな事が起こりそうになったら止めてくれるって話だ」
「カズマ。今からエリス教会に行って入信しましょう！そして寄付もしましょう！」
予想以上に喜んで貰えて嬉しい。
でも寄付だけで充分な気がする。
「入信はアクアが嫌がるから寄付だけにしておかないか？」
「そ、そうですね。取り乱してすみません」

エリス教会に行き、今月のお小遣いを全て寄付しためぐみん。
俺はどうせ神器回収とかさせられるだろうと思ってめぐみんの半分位にした。
神官やプリーストが俺とめぐみんをエリス様かのように崇めていたのはここだけの話だ。
誕生日会の話をしつつ日課を済ませ、帰ろうとした矢先。
雨が降ってきた。
仕方なくめぐみんが言う洞窟に避難した。
街でデートと思ってたのに台無しだ。
それに雨に濡れた事もあり、めぐみんは衰弱している。　やはり呪われていると思う。
「大丈夫か？ちょっと待ってろよ。木を集めてくるから」
「あ、ありがとうございます」
早くそれなりの数を見つけて戻らないと、めぐみんが心配だ。
そう思ったのが悪かったのか、数秒後叫び声がした。
「きゃあああああああ!?」

「だ、大丈夫か！ってなんだこれ！」
　着いてみるとめぐみんの足元を何かが這っていた。
「す、スライムです！魔改造スライムですよ！これやばいです！服溶かされちゃいますよ！カズマ早く助け、何じっと見ているのですか！早く助けてください！」
「すまん。なんかエロくて見惚れてた」
　俺何言ってんだろ。
「あああもう！あなたって人は！デリカシーとかないのですか！」
「悪かったって、ほら引っ張るから抜け出すぞ」
　全力で引っ張るも全く変わらない。
　どんどんめぐみんの服が溶けていき、そろそろパンツが危ない。
　そうなると視線がそっちに行く訳で。
「ちょっとカズマ！真剣に抜いてくださいよ！スライムがパンツ溶かすの待とうとか考えないで、助けてください！パンツあげますから！」
「待ってろ今すぐ助けてやるからな！」
　ここで助けなきゃ男が廃るってもんだ。
　めぐみんが蔑んだ目で見ているが気にしない。

　あれから数分経ったが、未だにめぐみんの救出は出来ていない。
　めぐみんの下の服は全部駄目になった。
　そう報酬であるパンツは無くなってしまったのだ。
　そして今、俺は中々めぐみんから離れないスライムではなく、めぐみんと戦っていた。
「なあ・・・、そろそろ、離してくれ・・・・・」
「嫌です・・・このまま・・・っ！一人だけなんて・・・・・・・」
　貧弱なステータスが憎い！
「カズマ・・・！カズマぁっ！あなたの事が、大好きです！愛しています！」
　色仕掛けに転じた模様のめぐみん。
　是が非でも俺を離す気はないらしい。

「お、俺も・・・・・・！　俺も、めぐみんが好きだ！愛してるっ！」
目には目を歯には歯をってな！
・・・こんな状況なら邪魔入らないって事か？
それとも昼間のあれか？
今はそんな事置いておこう。
それよりもしんどい。
ただでさえダッシュで、此処まで走って来たのだ。　もう体力が持たない。

「ダメだ！めぐみん、俺もう限界で、もう我慢できない・・・・・・！
もう出るっ！」
「待ってくださいカズマ！お願い、お願いですカズマ！一緒に・・・！
はあ・・・はあ・・・、い、いくなら、私も一緒にっ！」
俺の必死の抵抗は虚しく、がっちりホールドされていて動けない。
魔法使いのくせに体術も出来るってチートだろ！
「・・・もう限界だって！俺、もういくから！　そ、外に・・・外に出させろ・・・っ！」
「待って！　カズマ、このまま！　このまま、中にっ！」
俺は・・・
俺は！
こんな所で負ける訳には・・・
「ふう、助かったー！いい所に洞窟があって良かった」
まずい。
誰か来た。
しかもめぐみんが下半身裸のこの状態で。
「ここの奥はどうなって・・・・・・」
「見てたんなら小芝居せずに助けてくださいよおおおおお！」
「ちょっ、カズマ何言って、と言うかクリス！ええっとこれには色々ありまして、あっカズマ!?大丈夫ですか！」
俺は叫び終えるとめぐみんに心配されながら気を失った。

目が覚めるといつもの宿屋だった。
隣にはボーイッシュな服を着ためぐみんが寝ていた。
「起きたようだね」
「・・・遅かったのわざとですよね」
見ていたのだからもっと早くに来れたはずだ。
まさかあれをイチャイチャに含んでいたとか言い出さないだろうな。
「ち、違うよ!そんな訳ないってば!ここに来るまでに迷っちゃったんだよ」
「・・・で計画は何処まで進んでるんですか?」
「敬語はやめてください。寝ているとは言えめぐみんさんが居るのですから」
俺が頷くとまたクリスは話し出した。
「殆ど終わってるよ。後は贈り物を何にするかだね」
「それなら準備出来てるし大丈夫だ」
めぐみんがどうかは知らないが、俺はもう買ってある。
「そう言うなら問題なさそうだね。あっ、そうだ。実は隣町の・・・」
「手伝いますからあれお願いしますよ」
俺が素直に応じるとは思っていなかったのかクリスは驚いていた。
「任せておいて。それじゃあお邪魔虫は去るとするよ」
頼もしいクリスを見送り、未だに寝ているめぐみんを寝台に移した。
明後日に迫ったエックスデーの準備の為、俺は部屋を後にした。

今までの誕生日会とは異なりアクアが運営側に居ない事で順調に計画が進んでいた。
当日をここまで安心して迎えたのは初めてだ。
しかしここに来て少しピンチになっている。
「カズマ今日何の日か知ってる?」
そう、本人が確認してきたのだ。
これではサプライズ計画が台無しとなる。

「水の日だろ？お前にぴったりだな」
なんならこいつが生まれた日だから日本人は無意識に今日に定めたんじゃないかと思う。
確か一番水の使用量が多い月だから、節水の為にって事で設けられた日だったしないと思うが。
「それもそうなんだけど、ほら他にもあるでしょ？」
やっぱり祝ってくれモードだな。
「洗濯機か？それとも島の日か？あっ、パインの日だからパイナップル食いたのか？」
「違うわよ！他にもっと身近な物あるでしょ！」
誕生日だから怒らせたりはしたくないが仕方ない。
「身近って言われてもな。・・・花火したいのか？」
「・・・」
無言で訴え始めるアクア。
不覚にも可愛いと思ってしまった。
あと、めぐみんからの視線が痛いです。
「分かったぞ！肺の日だろ！一番身近なやつだしな」
今日が記念日多い日で助かった。
三百六十六日全ての日を覚えておいて良かった。
「・・・やっぱりいいわ。私、教会に行ってくるから」
今までになく気落ちしたアクアは言って、屋敷から出ていった。
そして部屋には、少し暗い雰囲気が漂っていた。
「・・・何とか凌いだがアクアには悪い事したな」
「サプライズの予定なのだから仕方ないだろう」
そうは言うものの、ダクネスも辛そうにしている。
「嗚呼、準備始めるか」
「豪華に仕上げてさっきの事を忘れる位喜ばせましょう」
めぐみんの言う通り、今の俺達にはそれくらいしか出来る事はなかった。
お昼となりそろそろアクアが帰って来る頃だ。

しかし、宴会とかを開いていると厄介だから、迎えを送った。
今は使者として出ていったクリスが連れて来るのを待っている。
「ただま～、クリス連れて帰って来たわよ」
「おかり～、飯出来てるから早く来てくれ」
さて二人が入って来るのを待つだけだ。
「今日のお昼は何か、な？」
「「「お誕生日おめでとう!!」」」
クラッカーの破裂音に驚くアクア。
そして同じく驚く俺達。
「みんなありがとう！今日は最高の一日ね！信者の子達からも祝って貰えたし、みんなからも祝って貰えて嬉しいわ！」
既にプレゼントを持ちきれない程持ち、見慣れない装飾を施しているアクアに、ある意味失敗した事に気付く俺達だった。
クリスも申し訳なさそうに後ろからプレゼントを抱えて入って来た。
「・・・アクア。今日はみんなで豪華な料理を作ったから楽しんでくれ」
誰よりも早く復帰したダクネスがアクアに促す。
後を追うようにみんな席に着いた。

「それじゃあプレゼント渡しだな。では私から」
「ダクネスありがとう！これゼル帝よね？」
ヒヨコの着いたネックレスをゼル帝と認めたアクア。
「うむ。実は私が作ったのだ」
「ホント！凄く嬉しい！」
「次は私です。アクアの好きそうな物を見つけたのでどうぞ」
めぐみんが渡したのは宝石だった。
「綺麗で形も良いし私好みだわ！めぐみんもありがとう！」
そういやコイツ石集めの趣味があったな。
念頭にあれば石ころ探す旅に出てたのに。
「私はもう髪飾りを渡してるから次はカズマだよ」
「そうか？じゃあ俺からはこれだ」

俺が先週まで連続で徹夜して作った傑作だ。
これで対戦相手が出来ると頑張ったのだから。
「カズマ。ありがとう！」
急に抱きつかれた。
アクアに。
そうあのアクアに。
「私も欲しかったのよこれ！もしかして自作ＰＣ？」
「そうだが、この状況何とかしてくれないか？」
めぐみんが顔引き攣ってるからマジで怖い。
ダクネスもピクピク目の辺りが動いている。
クリスだけが微笑んで見ていた。
「あはははは、つい興奮しちゃって、ごめんね」
ここまで喜んで貰えて嬉しい。
それと同時に気まずくもなった。
「みんなありがとう！お礼を込めて芸するから見ててね！」
アクアの芸は言い換えの効かない素晴らしさであった。
お茶をお酒に変えて、それを飲んだダクネスが酔い潰れて、寝てしまったが、まあアクアが楽しそうだしそれでいいか。
「あっ、カズマ。ダクネスは私が連れて行きます」
「いやいいよ。これくらい任せとけって」
「駄目です！酔っ払ったダクネスに襲われたらどうするんですか？カズマは食器を片付けておいてください」
めぐみんの言葉になにも返せなかった。
言われた通り、食器を戻そうとテーブルに戻るとアクアとクリスが外で何か話していたから、窓に近付き聞き耳を立てる。
「今日はありがとね。わざわざ来てくれて」
「アクアさんの為ですから気にする事ないですよ」
この二人って何だかんだで一緒にいる事多いものな。
「そうだ。エリス、丁度いい機会だから相談乗ってくれないかしら？」
「あのー、アクアさん？私はエリス様じゃないですよ？」
いつかみたく引っ掛からなかったクリス。

けど動揺はしてるな。
俺もまさかアクアが気付くとは思いもしていなかった。
「隠さなくていいわ。ダクネスは寝ているし、カズマとは何度も会ってるでしょ？めぐみんも紅魔族で、無宗教だから大丈夫よ」
「・・・先輩。何時から気付いていたのですか？」
「この前天界に戻った時、香水あげたでしょ？あれ日本の高級香水だから、この世界のクリスから同じ匂いがするなんておかしいじゃない」
・・・あいつ日本に行けるのか。
初耳だぞ。
「そ、そうですか」
「それに前から、何処か誰かに似ている気がしてたのよね。願い事に世界平和を願うなんて変わり者、エリスぐらいだもの」
天界に於いても世界平和願うのが少数派って、知りたくなかったな。
神様もやっぱり欲が強いのか。
・・・アクア見てたら納得だが。
「そんな事ないですよ。平和になれば、幸せな人が増えるのですから当然です」
エリス様マジ女神！
明日めぐみんと入信しに行こうかな。
「所で相談というのはなんでしょう？」
「・・・私ね。始め此処に連れてこられた時は最悪だって思ってたの」
こいつ！
それは俺のセリフだ！
「でもね。みんなと一緒に冒険したり、わいわい騒いだりするのが楽しくて、正直、天界に帰るとか忘れてた時期もあったくらいでね・・・」
「あれ？カズマどうかしたのですか？」
ダクネスを運び終えたらしいめぐみんが戻ってきた。
「いや何でもない。夜風に当たりたかっただけだ」
「？あの二人は何を話しているのでしょうか？全く聞き取れないで

す」
「俺も気になるけど全然だ。それより片付け再開するか」
「そうですね」
言うとめぐみんは片付けに取り掛った。
めぐみんが聞き取れなくて当然だ。
だってあの二人が話していた言語は・・・
「・・・・・ 今も凄く楽しいの。でも、これから私はどうしたらいいと思う?」
これ以上は聞いてはいけない気がして俺も片付けに戻った。

変わらぬ想い

《ｆｏｎｔ：ｕ３３》―ＫＡＷＡＲＡＮＵＯＭＯＩ―《／ｆｏｎｔ》

この一ヶ月俺はクレアと文通を続けていた。

理由は妹の誕生日パーティーをどうするかについて決める為だ。

みんなの意見を合わせて順調に計画は進んでいる。

一週間後が楽しみだ。

何故俺が参加できるかって？

それは俺が誰でもない魔王を倒した勇者だからだ。

最近はモテて辛いんだよな。

イグニスさんが禁止令を王様に出して貰ったにも関わらず、毎日王都や他国から貴族や王族が少なからず来るし、街を歩いていると声かけられるし、この前なんてレインの所がうちの娘をお願いしますってやって来たしな。

レインは全力で諦めるよう両親を説得してたけど。

そしてそれを全部めぐみんに寝る前に報告しなければならない。

これが辛い。

好きな子にナンパされた数を教えて縁談をどのように断ったか話すってどう考えてもおかしいと思う。

しかも未だに仲間以上恋人未満なんて言う曖昧な関係のままだ。

まあ、俺がヘタレるのが悪いんだけども。

話を聞いているめぐみんはいつも暗い感じで、反応もへえーとかそれで？とか冷たい感じだ。

引き籠もったら楽なんだろうけど、それだと普段から機嫌悪くなるから出来ない。

めぐみんと一緒に居ればいいってか？

あいつとデートするのはそりゃ楽しい。

でも、毎日やったら俺が持たない。

もう心臓がそれこそ爆裂しそうになるし、いい感じになったと思ったらお預け食らったりするから週一が限界。

全く進展のない俺達はどうすればいいのだろうか。

という事で俺は最も尊敬する友人を訪ねた。
「・・・あの、カズマさん？それで今日は惚気話と自慢話をなさりに来たのですか？」
「違うって、俺が今後どうすれば良いのか共通の友達であるゆんゆんに聴きに来たんだ。話の流れで分かるだろ？」
俺らの事詳しく知ってて応援してくれているのはゆんゆんだけだ。
他に相談出来る人が居ない。
バニルとかは論外だしな。
ウィズは根掘り葉掘り聴かれて恥ずかしい。
「すみません、分かりませんでした。でも相談には乗ります。だって友達ですから！」
・・・何だか悪い事してる気がしてきた。
何もしてないのに。
「ありがとう。それで具体的には何をすべきだと思う？」
「告白しましょう。二人が付き合っている話が公になれば縁談の話は今より減るでしょうから」
確かにゆんゆんの言う通りだが、出来れば苦労しない。
「・・・告白はしようとはしてる。でもいざって時に出来ないんだ」
「カズマさん、そこは甲斐性の見せ所ですから頑張ってください」
俺がヘタレだってめぐみんから聞かされてるんだろうな。
俺ってそこまで甲斐性なしに見えるか？
「ゆんゆん。違うんだ。さっきも言ったろ？そう言う雰囲気になるとな決まって何かしらの邪魔が入る呪いにかかってんだよ。だからしないんじゃなくて出来ないんだ」
「・・・めぐみんの実家で二人で閉じ込められたら確実では？」
ゆんゆんってこうなんだろう？
言う時はズバッと言ってくるからびっくりする。
というかゆいゆいさんが俺たちを閉じ込めてるの知ってるのか。
「それは勘弁してくれ。確かに一番確実なんだけども」
「いっその事押し倒してみるとかはどうでしょう？」
この子は何を言っているのだろうか？

「ごめん今なんて？」
「えっとですから押し倒してみるのはどうかと」
少し照れながら話すゆんゆん。
当事者じゃないからって言いたい放題だなおい。
「出来る訳ないだろ。それで嫌われたら立ち直れねえよ」
「めぐみんなら喜んで受け入れると思いますよ」
実際そうなんだろうと思ったりもするが、だからと言ってやる訳にはいかない。
もしもの可能性がある。
めぐみんはムードがどうとかいつも言ってるしタイミングを誤ることが一番の課題だ。
「取り敢えずそっち方向はなしで頼む」
「では、誰にも言わずに二人で何処か遠い街でデートというのはどうです？」
確かに、ありなのだが。
前回それでミツルギに会って面倒だったしな。
「いいと思う。他にも何かないか？」
「そうですね。あっ、なんの脈絡もなくプロポーズすればいいのでは！」
「それ試したら、あいつ寝てたんだよな。でもその二つまたやってみるわ」
そう簡単にはいかないか。
今日は意見交換で終わりそうだな。
「後は」
ここで区切りを付け黙り込むゆんゆん。
そこまで悩むならもう諦めてくれてもいいのに。
いい子だなと思って顔を見ると、ゆんゆんは恐怖に支配されていた。
そして後ろには当然あいつがいる訳で。
「・・・」
振り向くと無言でやばいオーラを放ってるめぐみんがいた。

俺と目が合うと少し微笑んだのだが、それがまた怖い。
「カズマ、クレアから手紙が届いてましたよ。では私はこれで。カズマとのお茶楽しんでくださいね。ゆんゆん」
めぐみんはそれだけを告げて去っていった。
最後のが一番怖かった。
何処からどう見ても笑顔なのに、殺気を放ち続けていた。
これが浮気だったら何されてるか分からない。
「・・・ゆんゆん。今日はここまでにしよう。後は俺が何とかしとくから。今日はありがとう」
未だに怯えていたゆんゆんは何か言おうとしていたが聞かずにお代だけ置いて俺はめぐみんを追った。

「待ってくれ！めぐみん！」
「何ですか？デート続ければいいじゃないですか」
早く誤解解かないとまずい。
あの日帰ってきた時の感じと同じだ。
「いや、あれは」
「別に私はカズマが誰と何してようが構いませんよ。ほら続きを楽しんで来てください。私は帰るので」
だめだ。
話を聞く気がない。
だからといって諦めはしない。
「待てって！」
「しつこいですよ！離してください！」
うっ、ここまで拒絶されるといくら冷めた目に慣れてると言ってもきついな。
「しつこくて結構だ。でも離さないからな。話聞いてくれるまでは」
「・・・分かりました」
諦めたのか、暴れるのを辞めた。
静寂が訪れ、また恐怖が支配し始めた。
「ゆんゆんと、一緒に居たのは、・・・」

「デートでしょう？分かってますよ。でそれがどうかしましたか？」
「違う！俺はお前にプロっ、」
「ぷろ？何ですか？何が言いたいのかさっぱり分からないですよ」
危ない言ってしまう所だった。
でもこれってどう言い訳すれば・・・
『なんの脈絡もなくプロポーズすればいいのでは？』
よし、ここはゆんゆんの言っていた案で行こう。
それにこれ位しないとめぐみんの怒りが収まりそうにない。
「めぐみん！俺はお前の事が、」
「カズマさん！お釣り忘れてますよ！」
こんな事だろうと思ってたよ。
ちくしょおおおお!!
「・・・カズマ。帰りましょう。続きはその後に」
めぐみんは言い終えると帰って行った。
さっきまでの暗いオーラは消えていた。
取り敢えず助かったのか？
「あの、大丈夫でしたか？」
「おかげさまで、何とか」
邪魔されたようで助けられた。
そんな複雑な気分で、ゆんゆんからお釣りを貰った俺はめぐみんの後を追って帰った。

屋敷に着くと玄関でめぐみんが待っていた。
相変わらず表情は冷たいままだった。
「ただいま」
「おかえりなさい」
「・・・」
「・・・」
気まずい。
何か話題は・・・
「そ、そう言えばクレアから手紙って言ってなかったか？」

「これですね。どうぞ」
多分俺を見つけたらそのまま話をするつもりだったのだろう。
ローブの中から手紙が出てきた。
「なあ、一人で見て欲しいってあるんだが」
「そうですか、では話はまた後で」
クレアには感謝だな。
そう思って手紙を開けた瞬間。
眩い光とともに俺の意識は途絶えた。

それは突然起こった。
私が先に部屋に戻ってから数分後。
カズマの叫び声が聞こえた。
何事かと見に行くとそこには一枚の紙だけが残されていた。
サトウカズマは王家が預かった。
ただそれだけが書かれている。
私が呆然としていると玄関が勢い良く開かれた。
そちらを見るとダクネスとクレアが息を荒くして立っていた。
クレア曰くこれは偽造された物だと言う。
ダスティネス家との会食中に今回は直接渡す予定で送っていない手紙が届いたと知ったらしい。
すぐにでも王都に向かおうとテレポート屋に向かうも臨時休業で行けず、ゆんゆんもあの後里に戻ってしまったので何も出来なかった。
クレアの魔法使いは何でも臨時の人でこの作戦の関係者だったのか消え去っていた。
ここまで偶然が重なるとすべて仕組まれていた必然だと気付く。
後は城に残っているレインに託すしかない。
それでも私達は何か手段はないかと模索するのであった。

目が覚めると何だか見た事のある天井だった。
そう、確かこれは……
「・・・おにい……きて！」
我が妹アイリスの部屋だ！
見た事ある訳だ。
・・・何で俺ここで寝てんの？
確かゆんゆんに相談に乗って貰って、めぐみんに見つかってそれで・・・あっ、手紙か!?
あれを開けた途端に意識飛んだからな！
「アイリス様、朝食で・・・さ、サトウ殿!?如何してここに？」
「信じて貰えないだろうけど、目が覚めたらここで寝てた」
クレアに見つかったら何されるか分かったもんじゃない。
レインで助かった。
「・・・嘘はついてないようですね。取り敢えずここを出て話しましょう」
アイリスと話したい所ではあったが、状況確認の必要もあるし、レインの指示に従って部屋を出た。
その後はレインの部屋に通された。
「何があったのか教えて頂けませんか？」
「いや、うーん。多分あれ偽物なんだろうけど、俺宛にクレアから手紙が届いて、中身を確認しようとしたら閃光と共に気を失ったんだ」
「なるほど」
レインは何かを知っているようだった。
とは言っても困惑の方が大きいようだけど。
「このままだとカズマ殿が危険です。取り敢えず私の家に移りましょう」
「危険と言うと？」
「実は、王族派貴族の中に勇者の血をどんな手を使ってでも取り込まないといけないと言う、強行派閥がありまして」
そう言えば魔王を倒した勇者は王女と結婚出来るんだっけか。
それを強制的にさせる為の工作活動が行われたってことだな。

「今回の件もその派閥が動いたと？」
「恐らくです。派閥と言ってもごく少数なので、放置していたのですがこんなことになり申し訳ないです」
なるほど、タカ派が多い訳じゃないのか。
「分かった。レインが謝ることじゃねえよ。でもどうやって出るんだ？」
「それなら大丈夫です。テレポートを使います」
こうしてレインの家に退避した訳だが、俺たちはある事を忘れていた。
それは……
「お嬢様がカズマ様を連れて帰られました！」
「旦那様に早くお取次ぎを！」
「カズマ様、お嬢様をよろしくお願いいたします！」
そう、家の者達が俺らを引っ付けようとしていた事だ。
慌ただしく使用人達が荷物を受け取ると屋敷の中へと戻って行った。
「サトウ殿、すみません」
「・・・いや、仕方ないって俺も忘れてたし、それに前にもこんな事あったしな」
めぐみん家に着いて、扉が開いてめぐみんに似た可愛い子が出てきたと思ったらびっくりだった。
あの時のひょいざぶろーさん怖かったな。
お金の話したら手のひら返しが凄かったけど。
「そうなのですか？」
「めぐみんの実家でも色々あってこんな感じだった」
こんなのばっかりだよな。
まともに迎えられた試しがない。
「カズマ殿も大変ですね」
うっ、苦労を分かって貰えると嬉しい。
心が洗われるみたいだ。
めぐみんがいなかったら、このまま結婚してる自信がある。

屋敷に通されてから何とか誤解を解き、泊めてもらう事になったのだが、またしても問題が起こった。
凄いデジャブなのだが、俺はこの程度ではもう驚かない。
「か、カズマ殿!?どどど如何して私の部屋に!?」
「執事さんにここですって言われたんだが」
嫌な予感がする。
多分この後扉の向こうから声がするんだよな。
『ロック』
やっぱり。
さてと、俺の寝る場所は・・・
結構あるな。
ベッドが四つもある。
「あ、あのう?カズマ殿?如何して落ち着いていられるのですか?」
「だって何回もめぐみんと閉じ込められたし、その時は布団一つしかなかったし、ダクネスとも色々あって手錠つけたまま寝てたこともあるし、これだけベッドがあれば焦る事ないかなって」
自分で言っといてなんだけど俺何言ってんだろ?
急に恥ずかしくなって来た。
ダクネスとの話は余計なこと言った気がする。
「・・・ララティーナ様とはどのようなご関係で?」
そりゃあ気になるよな。
だって手錠つけて一緒に寝るって明らかに変だ。
「あいつにファーストキス奪われた関係だけど、付き合ってはないし、手錠は俺に納税させるために逃げないようにつけて、鍵が見つからなくて仕方なくだからな」
「えっと、キスをされたのですか?」
「俺が目を閉じて殴られるの待ってたら、不意打ちでやられたんだ」
あの時の感触は凄く良かった。
「なるほど、ではめぐみん様との関係は?」
「仲間以上恋人未満って言う中途半端な関係だな」

「めぐみん殿の事はどう思っておられるのでしょう?」
嫌だなあ。
ウィズにもよく聴かれるけど、この感じにはまだなれない。
さっきダクネスの話の時に聞かなかったのにここで聞いてくるあたり、気付いてるのかもしれない。
レインはあまり会わないし、言ってもバラシはしないだろうからいいか。
「・・・好きだよ。勿論。異性として。でも中々告白出来なくて困ってるんだよな」
「そうですか。告白頑張ってくださいね」
また応援者が増えた。
喜ばしい事だ。
「所でこの部屋って如何してベッドが四つもあるんだ?」
「それはアイリス様が我が家に避難した際、護衛を含め寝られるようにと緊急時の備えです。カズマ殿はこちらを使ってください。訓練でもこのベッドはまだ使ってないですから」
「ありがとう」
王族の避難経路や隠れ家としての機能。
常に護衛をしている者の家だからこそ出来る計画。
流石だな。
そんな事を考えていると気付けば眠りに落ちていた。

「・・・カズマ殿にはもう相手がいたのですね」
言ってレインはある一点を見つめ、深くため息をついた。

翌日目を覚ますと目の前にレインが居た。
「おはようございます。もうお昼ですが」
「おはよう。で何してたんだ?」
まさか俺が起きるのを待っていたとかじゃないだろうし。
「この部屋から出られないので暇つぶしにカズマ殿の寝顔を観察していました」

・・・朝もロックされてるってゆいゆいさんよりやばいなレインの親御さん。
てか寝顔観察されてたの恥ずかしい。
「この後はどうする？」
「私はそろそろアイリス様の護衛がありますので王城に向かいます」
レインがここに居てクレアがアクセルなら誰が見ているのだろう？
「じゃあ俺も行っていいか？ちゃんとアイリスに会いたいからさ」
「ではこの鎧を着てついて来てください。これならカズマ殿とは分からないでしょうから」
こうして俺は妹と再開する事となる。

「お兄様！昨日は何があったのですか？」
「いや、まあ色々あってレインに助けて貰ってな」
王族派貴族に拉致られて、アイリスの部屋にいたなんて言える訳ないしな。
「・・・レインがお兄様と一夜を過ごしたと言う噂は本当だったのですね」
「あ、アイリス様!?何処からその情報を!?」
「新聞です。やっぱり事実だったのですね」
マスコミとか盲点だった。
レインが否定しなかったのも不味い。
「ご、誤解ですよ！カズマ殿を我が家で一時的に保護しただけでして」
「そうそう、レインと閉じ込められて、一緒に寝させられた以外は何も無かったから安心しろ」
「か、カズマ殿!?」
あっ、しまった。
余計な事を言ってしまった。
俺こっちに来てから不要なこと言い過ぎな気がする。
「た、確かに同じ部屋で寝たけど、何も無かったからな！エリス様に誓って！」

「はあ、何も無かったようですね」
信じて貰えて良かった。
・・・そう言えば俺ってこの後どうなるのだろうか？
「お兄様、また遊んでくれませんか？」
「おう、任せとけ！」
「レインも一緒に遊びましょう」
アイリスも何があったのかは察しているのかもしれない。
流石は王女様であり、俺の妹だ。

「次はレインの番ですよ」
「はい」
レインは言われるままカードをとった。
そして、何となく分かるババの持ち手。
恐らくアイリスだろう。
レインは俺がジョーカーを引かないと分かっているから、自身がジョーカーを持った時点で負けだと確信し、アイリスが負けることはないと安堵している。
レインは揃わなかったのか俺にカードを差し出した。
「・・・カズマ殿、どうぞ」
「おう」
この感じはまだアイリスかな。
よし、揃った！
これであと一枚だ。
「アイリス、ほれ」
「これです！」
ペアを見つけたのか喜びながらレインに手札を向けた。
これ誰が持ってるか分からなくなってきたぞ。
そろそろ警戒した方が……
バンッ！
「アイリス様ご無事です、か？」
「カズマ大丈夫です、か？」

「カズマ大丈夫、か？」
「カズマあんただけ贅沢三昧なんてずるいわ！私も交ぜなさいな！」
一人変なのがいたが、みんな俺らを心配して来てくれたようだ。
見ての通り全く問題はないわけだけど。
「俺もアイリスも無事だぞ」
「何やってるんですか？私達が必死になってここまで来たと言うのに」
「貴様！アイリスさまと遊んでいるとは何事だ！」
散々な言われようだが、俺は悪くない。
だって来たくてここに来たわけじゃないし、時間つぶしに遊んでただけだし。
「・・・一つ言っておくけど俺が一番の被害者だからな？」
「それはそうだが、何が起こったのだ？状況の説明をだな」
「簡潔に言うと気付いたらこの部屋にいて、その後レインの家で保護してもらってた」
一晩泊めて貰っただけだけど、王城で泊まるよりは安全だったはず。
「この新聞記事にある通りで、あっ、レイン何するんですか！」
「アイリスそれは不味い！レイン燃やせ！」
言われてレインはライターで新聞を焼却した。
ライターは王都でも普及してるらしい。
ここまで売れてるなら印税方式にすればよかったかもな。
「何を燃やしたんですか？」
「何でもないから、それよりも早く帰ろうぜ。ちょむすけとゼル帝にエサやりたい」
「怪しいがまあいい。レイン、カズマが世話になったな」
「いえ、成すべきを成しただけです」
と挨拶にみんなが気を取られている間に、俺はクレアに近付いた。
「アレの準備は出来てるのか？」
「もちろん。つかお前ちゃんとしろよ。気付いたらアイリスと結婚してる所だったぞ」

「それについては私のミスだ。レインがいるからと安心してしまってな」
「実際レインに助けられたからそれもそうか。で、俺は会に参加しても問題ないのか？」
派閥争いに巻き込まれてる状態だし、俺が居たらまた何かしらのアクションを王族派貴族の過激派が何か仕掛けてくるかもしれない。
「ああ、腐っても王族派の貴族たちだ、式典中に問題を起こすとは考えられない」
「そうか。物はダスティネス家名義で届くことになってるからな」
「分かった。アイリスのこと頼むぞ」
「言われるまでもない」
クレアは妹を託すにあたって一番信用がおける。
レインの方が安心はできるけど、熱意が違うからな。
「皆さんお帰りですよね。テレポートでお送りしますので、外へ」
と俺たちは家に帰り、王女生誕式典までの間の準備を進めるのであった。

時は流れアイリスの誕生祭前日。
アクセルの街は活気に溢れていた。
ダスティネス家主催のこの催しは、ベルゼルグ全土に知れ渡り、各地から人が押し寄せている。
そんな中、俺はアクアと共に拘束されていた。
「おい！誰か開けてくれ！明日は俺の妹の誕生日なんだって！」
「そうよ！妹の誕生日を祝わせないなんて酷いわ！カズマさんが可哀想よ！」
俺達が捕えられているのは、式を成功させる為だとかダクネスが言ってた。
ここまで計画したの誰だと思ってんだって話だよちくしょう！
めぐみんもダクネスに肯定的だし、俺らの味方って言ったら、コイツしか居ない。
「そうだ！そうだ！俺みたい何かした訳でもねえのにカズマ達が捕

まってんのは変だ！ダチを解放しやがれポンコツ警察！」
「ダスト！お前は黙ってろ！黙っていれば直ぐに出られるぞ！」
「・・・」
これで味方は居なくなったな。
くそっ！
もっと早く陰謀に気付いていれば。
皆より先にアイリスに合わせようなんて言うから、付いてったのに直ぐに捕縛ってなんだよ。
こんな事ならもう明日にならなくていいわ。

誕生祭当日、早朝。
めぐみんが迎えに来てくれた。
曰く、アイリスが寂しがるだろうから仕方なくだと言っていた。
でもこれダクネスは知らないだろうな。
と思いつつも俺とアクアは屋敷に戻り、プレゼントの用意をした。
そして始まる妹の誕生祭！
『皆様お集まり頂き、ありがとうございます。只今よりアイリス王女の誕生祭を執り行います。司会は・・・』
アナウンスと共に街全体が湧いた。
某遊園地のパレードみたいな行列が入ってきた。
それを三人で眺めていると、レインがやって来た。
レインが迎えに来てるってことは俺とアクアの不当逮捕はダクネスの独断だな間違いない。
「みなさん。今日はありがとうございます。これからダスティネス家に向かいますので、ご乗車ください」
こうして俺達は会場入りした。

「カズマ!?それにアクアも!?めぐみんこれは一体どういうことなんだ」
「・・・アイリスが可哀想だと思いまして」
「はあ、分かった。来てしまったものは仕方ない、二人ともお願いだか

ら変な事はするなよ？」
俺らが応えようとした時。
アイリスと白スーツが入ってきた。
一番の黒幕と思ってたクレアが驚いてないし、完全に独断だな。
帰ったらダクネスが泣いていやがることしよう。
「お兄様!!来てくださったのですね!!」
「当然だろ！お誕生日おめでとう！これお兄ちゃんからのプレゼントだぞ」
「ありがとうございます!!お兄様!!」
俺があげたのは手作りミサンガだ。
アクアとエリスの髪も使ってるからほぼ間違いなく願いが叶うだろう。
これでアイリスが自由に行動したいって言うのが、実現出来ればいいのだが。
兎も角、喜んでもらえて良かった。
「アイリス、おめでとうございます。私からは眼帯です。あと、お兄様お兄様うるさいですよ！」
「ありがとうございます。お揃いの物を付けるの夢だったから凄く嬉しいです！あと、お兄様はお兄様です！」
また二人の妹枠争いが始まった。
めぐみんは最近、ロリ枠兼嫁枠になりつつあるから妹枠である必要ない気がするけど、譲れない物があるらしい。
「二人を見てるとほっこりするわ。私からはこれよ。私が見つけた中で一番綺麗な石よ！」
こいつ、金ないからってそれはないだろ。
と思ったのだが、実物を見るとそうでもなかった。
本当に綺麗で宝石みたいな石だった。
アイリスも気に入ったのか大事に蔵っていた。
「アイリス様、私からは首飾りを。私が採ってきた宝石で作らせた物です」
「ララティーナもありがとう！」

本名呼びにダクネスは照れていたが、アイリスは特に気にしていなかった。
と言うか気付いてない。

プレゼント渡しが終わると話せる機会は無くなり、晩餐会でやっとゆっくり話せる時が来た。
「お兄様、少しよろしいでしょうか？」
「嗚呼、俺も話がしたかった所だ」
クレアとレインが見ていて止められないかと思っていたが、そんな事もなかった。
あの二人、特にクレアはどうしたのだろう？
いつもなら止めにくる展開だろうに。
さて、魔王戦の話とか何処から話そうか。
「お兄様、好きです。私と結婚して頂けませんか？」
「実はアクアが・・・・・今なんて？」
「私と結婚して頂けませんか？」
聞き間違いではなかったようだ。
「結婚って藪から棒に如何した？」
「如何したではありません。魔王を討伐した勇者は、王女と結婚出来るのですからお兄様いえ、勇者カズマ様にお願いしているのです」
思いもよらない告白。
凄く嬉しい。
でも苦しい。
あの時と同じだ。
いや、それよりも酷いかもしれない。
相手は王女様。
しかも全く知らない相手ではなく、妹みたいに可愛がってきた子だ。
断る理由なんて普通はない。
でもやっぱり俺には無理だ。
如何してもあいつが脳裏に浮かぶ。

ここで断られ悲しむであろう少女の姿よりも、見たくないあいつの泣き顔が。
「・・・ごめん。それは無理だ。俺は」
「謝ることはありませんよ。カズマ様は、やはりめぐみんさんが好きなのですね」
「・・・嗚呼。昔の俺だったら手を取ってただろうけど、もう俺の中であいつはかけがえの無い存在なんだ」
「カズマ様、私とめぐみんさんの二人と結婚しても良いとなっても私とはダメですか」
この国は一夫多妻制ではないが、アイリスの本気度が伺える。
でもこれを受け入れる訳にはいかない。
「ごめん。それも出来ない。好きって言ってくれたのも今のも凄く嬉しい、嬉しいけど。それじゃあダメなんだ。何がって言われるとあれだけど、そのほら」
ああもう、語彙力の低さが恨めしい。
「大丈夫です。お兄様の気持ちは分かりました。さっきの事は忘れてくださいね。では私は戻ります」
涙を必死に堪えて、取り繕った笑顔で別れを告げると、アイリスは席へと戻って行った。
引き留めたい気持ちに押されかけたが、後ろに居たクレアとレインを見て何とか制止出来た。
二人は分かっていて見ていたのだろう。
・・・後でクレアに殺られないか心配になってきた。
どうしよう。